三重県埋蔵文化財調査報告 232

山室遺跡発掘調査報告

附編　長持古里遺跡調査報告

２００２・３

三重県埋蔵文化財センター

序

久居市南東部の水田地帯に広がる山室遺跡は古代から中世にかけての集落跡です。

南には雲出川が豊かな水を運び、この地域の生活に潤いを与えつづけます。しかし、その川も一夜にして激流となり、この沃野を一変させました。江戸時代のことです。ここに古くから暮らしを営んできた人々は北側の丘陵に移り住むことを余儀なくされたのです。

今回の発掘調査は農道整備事業に先だって行われたものですが、先人たちの自然と闘い、暮らしを豊かにしてきたその一端が垣間見れればと思います。また今後、土中から明らかになった彼らの住まいの跡や生活道具は地域の人々によって守られて、後世に伝えられることを願ってやみません。

今後も三重県では豊かな環境を創造するため、開発・改良事業が進められていきますが、埋蔵文化財の一つひとつに刻まれた先人たちの足跡を大切に守っていきたいものです。

２００２年３月

三重県埋蔵文化財センター
所　長　　桂　川　　哲

例　　言

1　本書は、三重県久居市牧町字山室地内に属する山室遺跡の発掘調査報告書及び新家町字長持古里に所在する長持古里遺跡の調査報告書である。

2　両調査は、平成12年度一般農道整備事業（久居東部二期地区）に伴って、緊急発掘調査を実施したものである。

3　調査の体制は以下のとおりである。

調査主体　　三重県教育委員会
調査担当　　三重県埋蔵文化財センター
　　調査第一課
　　主幹　河北秀実
　　係長　筒井正明
　　主事　中川　明、臨時技術補助員　山岡奈美恵
調査期間　　平成13年１月15日～平成13年２月10日

4　当報告書の作成業務は三重県埋蔵文化財センター調査第一課および資料普及グループ職員が行い、執筆及び全体編集は、中川が担当し、図表等は山岡が編集をおこなった。遺構・遺物の写真撮影は両名が実施した。

5　本書で示す方位は、国土調査法の第Ⅵ座標系を基準とし、方位の表示は座標北を示す。なお、磁北は6°20′西偏（平成９年２月）している。

6　本文及び表中で用いた遺構表示略記号は、以下のとおりである。

ＳＢ:掘立柱建物　　ＳＤ:溝・自然流路　　ＳＫ：土坑　　Pit :柱穴・小穴

7　本書で報告した記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

8　調査にあたっては、地元久居市牧町、新家町の方々をはじめ、久居市教育委員会、津地方県民局農林水産商工部にご協力を頂いた。記して謝意を表します。

9　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ．前　　言……（1～3）
Ⅱ．位置と歴史的環境……（3～4）
Ⅲ．層序と遺構……（5～9）
Ⅳ．遺物……（10～17）
Ⅴ．結語……（18）
Ⅵ．附編　長持古里遺跡調査報告 ……（29）

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図……（2）
第２図　調査区配置図……（4）
第３図　土層断面図……（6）
第４図　遺構平面図(1) ……（7）
第５図　遺構平面図(2) ……（8）
第６図　SK10・11遺物出土状況図……（9）
第７図　出土遺物実測図(1) ……（12）
第８図　出土遺物実測図(2) ……（13）
第９図　出土遺物実測図(3) ……（14）
第10図　出土遺物実測図(4) ……（15）
第11図　出土遺物実測図(5) ……（16）
第12図　出土遺物実測図(6) ……（17）
第13図　調査区位置図……（29）
第14図　出土遺物実測図(7) ……（29）

表　目　次

第１表　遺構一覧表……（8）
第２～５表　遺物観察表（１～４）……（19～22）

図　版　目　次

PL1　A地区全景（西から）
　　D地区全景（西から）
PL2　SK10土器出土状況（北から）
　　SK11鉄器出土状況（北から）
PL3　出土遺物（土器）
PL4　出土遺物（土器）
PL5　出土遺物（鉄器）
PL6　出土遺物（土器）

Ⅰ 前　言

1　調査の契機

近年、久居市東部地区もほ場整備が進み、大型機械も導入されたことで農産物の収穫も大幅に増大している。しかし、農道の整備計画がかたまってくるにつれ、拡幅整備もこの地域で着工されてきた。今年度の整備事業によって収穫作業が大幅に改善されることになろう。

山室遺跡は行政上は久居市牧町に所在する。遺跡番号は207号である。今回の調査は平成12年度一般農道整備事業が計画されたことによって遺跡の現状保存が不可能になったために実施することになった緊急発掘調査である。事前に遺跡の現状を把握するために、平成10年3月に分布調査を実施した。ここからは土師器、須恵器を採集している。これをもとに津農林水産商工部と協議した結果、工事内容について遺跡を脅かすことが判明したので、平成12年10、12月に総計26地点で試掘調査を実施した。その結果、Pit、溝と流路跡を確認し、山茶椀・土師器鍋が出土した。これらをもとに当該部局との間で文化財保護の協議をした結果、工事内容が遺構面を削平すると判明したため、本調査を実施し、記録保存を行うこととした。

本調査は、平成13年1月15日に着手し、同年2月20日に終了した。面積は600㎡である。

2　調査の経過

(1) 経過の概要

山室遺跡の調査は畑地部分については試掘、及び工事立会の結果、遺構密度が高いという予想であった。しかし調査依頼を受けたのが年度末ということもあって、調査期間や整理期間の制約を受けた調査になった。2月上旬は天候が不安定であったために、予定期間を2週間経過した調査であった。各地区の調査が完了次第、順次引渡しを行った。

現地調査にあたっては地元、新家町の方々に補助していただいた。芳名を記して感謝申し上げます。

飯田つた子、小田愛子、奥田俊子、小田かよ子、浅井よし子、飯田ハルミ、河野貞子、田川みね、山崎ふさ。(順不同、敬称略)

(2) 調査日誌（抄）

1月15日　重機による表土除去開始。

1月16日　作業員9名で包含層掘削開始。
遺構検出でpitと溝を検出。

1月17日　溝を掘削、埋土から土師器、須恵器出土。

1月19日　B地区の清掃。C地区包含層掘削。
A地区の土坑、溝の掘削続行。

1月22日　C地区包含層掘削。B・C地区土層断面図作成準備。(レベル移動を含む)

1月23日　A地区の溝掘削、土坑掘削、埋土から山茶椀出土。A地区全面清掃、遺構写真撮影。A～C地区、土層断面図作成。

1月26日　A地区、遺構平面図作成。土層断面図補足実測。

1月29日　B・C地区、平板測量完了。コサック終了。同地区の下層確認（3地点）実施。

1月30日　A地区の溝から多量の山茶椀出土。地点を図面に記録。

2月5日　D地区包含層掘削。A地区下層確認（SD5・6周辺を人力掘削）

2月8日　下層確認続行。(遺物の出土地点を平面図に記入)

2月9日　D地区のpit、SD13を掘削。土師器が微量出土。A地区南壁下の土坑から山茶椀、鉄鎌、土師器出土。

2月13日　D地区遺構検出。座標測量。A地区南壁下から新たに土坑検出。埋土から土師器、鉄釘出土。中世墓か。

2月14日　SK10・SK11で遺物取り上げ。出土地点とレベル計測。作業員終了。

2月15日　A地区南壁土層断面図を補足

2月19日　D地区平板測量2名。コサック完了。

2月20日　D地区下層確認完了。現地引渡し終了。

第１図　遺跡位置図（１：50,000）　国土地理院「津東部・津西部・大仰・松阪港」（１：25,000）による

(3) 調査の方法

A　調査区の設定

調査区はA地区の道路予定地のセンターラインを平行に延ばした基軸に対し4m四方のメッシュを区切った。東から西へは数字の1～9を割り当て、南ら北へはアルファベッドのA～Bを割り当てた。B地区・C地区・D地区の設定も基本的にはA地区の基軸を使用し、グリッドの設定をした。

B　掘削の方法

A地区の掘削は表土の運搬方法を考慮して、町道から遠い東側から着手した。まず表土を重機で掘削し、包含層から遺構検出面までと各遺構を移植ゴテを使用し、人力掘削した。

C　図面作成について

遺構略測図は1／100で作成し、各個別の遺構図、および土層断面図は1／20で作成した。個別の遺物出土状況図は1／10で作成した。

D　遺構写真について

A地区の全景写真を6×9ウィスタカメラを使用し、個別の遺構写真は6×9ウィスタカメラとニコン35mmカメラを併用し撮影した。フィルムはモノクロをネオパンSS、カラーリバーサルはSENSIA Ⅱを使用した。

(4) 文化財保護法等による諸通知

文化財保護法（以下、法）等にかかる諸通知は、以下により県教育長あてに行っている。

・　法に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項（県教育長あて）

平成13年1月15日付け教埋第339号

・　法第58条の2第1項（県教育長あて）

平成13年1月23日付け教埋第338号

・　遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（久居警察署長あて）

平成13年3月27日付け教埋第8−21号

Ⅱ　位置と歴史的環境

1　位置と地形

山室遺跡（1）は、久居市の南東部の丘陵と雲出川に挟まれた後背地または氾濫原に位置する。

遺跡周辺の平坦面は第四紀（洪積世）に形成され、本遺跡はその段丘層上に広がり、分布している。遺跡の立地する低位段丘上には雲出川の侵食運搬作用によって自然堤防や微高地が点在している。本調査によって確認した地質は上層の砂質土やシルト土である。それらに本遺跡の中世の遺構や遺物が遺存していた。

2　歴史的環境

(1) 縄文時代

久居市井戸山町に所在する行成遺跡（2）は中期の遺跡で破片が採集されている。またここから東方の木造町には木造赤坂遺跡（3）が所在する。サヌカイト製の石鏃や壷の細片が土坑から出土している。これらの発見によって縄文期の文化のはじまりが伺える。

(2) 弥生時代

新家町に位置する新家遺跡（4）は丘陵の南端部東から西へ帯状に分布し、緩く連続する斜面上に立地する。分布調査の結果、壷、石器が採集されている。また、隣接する、岸橋遺跡（5）は丘陵裾から南東の水田地帯に広がる遺跡である。須恵器、土師器壷が多数確認されている。長持元屋敷遺跡（6）では昭和53、54年に発掘調査がおこなわれた。当代から江戸時代にわたる複合遺跡で、前期の方形周溝墓と竪穴住居2基が確認されている。[1] 西の丘陵南側には垣内遺跡（7）が所在する。昭和44年の発掘調査により確認された遺跡である。高杯や壷が出土した。これらの遺跡は分布状況から考えると、久居南部丘陵上に位置する立地条件の良好なもので人々の生活が中期以降急速に栄えた証であると考えられる。

(3) 古墳時代

当代の始まりは市内西部に求められる。戸木町所在の善応寺古墳群（8）は9基で構成される前期古墳である。ここからは四獣形鏡が出土したと言われる。また、木造町に所在する大塚山古墳（9）からは主体部内より碧玉製合子が出土した。木造里中遺跡（10）では鏡2面の他に管玉、ガラス玉が出土している。一方、当遺跡近隣で内陸部の新家北方古

墳群（11）では金環、ルリ玉、鉄刀や須恵器杯等が確認されている。これらの遺跡は当代でも特筆される。

(4) 奈良時代・平安時代～中世

奈良～平安期の遺跡分布は少数で、近年の発掘調査も実施されていないことから詳細な集落の様子は解明されていないところが多い。一般集落の様相を垣間見ると、井戸山所在の行成北方遺跡（12）では、奈良時代の須恵器が出土し、平安時代になると、木造町に横造遺跡（13）が所在する。須恵器をはじめ、山茶椀や青磁器が採集されている。戸木町に位置する上野遺跡（14）は平成11年に民間会社を導入した発掘調査によって明らかになった面積47,000㎡の広大な遺跡である。調査の結果、古代～中世にかけての大集落群や堀、区画溝等が検出された遺跡である。特に9地区のうち掘立柱建物群は区画溝によって区切られ、総計61棟もの建物が確認されている。[2] 長持元屋敷遺跡では掘立柱建物1棟と1列に並ぶ土坑群7基が確認され、中世室町期における人々の生活様式が明かになってきた。

一方、当地域の支配勢力に注目すると、木造町の集落北側に北畠顕俊の居城、木造城（15）がある。1366（正平21）年に築かれた城で久居、七栗郷を領有下に置き、この地域の最重要拠点になっていた。彼は1569（永禄12）年に織田信長の伊勢侵攻にあたって柘植三郎左衛門の謀略によって宗家の北畠氏と戦闘を交え、結局織田勢に属することになった。他にこの地域で支配勢力を高めたのは木造氏であった。中でも康信の牧城（16）、政宗の川方城（17）、具政の戸木城（18）は彼らの隆盛期の居城として著名である。[3] また宮山城（19）は彼が北の備えとして築城したものである。これら築城の推移からも推察できるように14世紀中ころから16世紀にかけては当地域も群雄割拠の時代と言える。

註）

①辻富美雄『長持元屋敷遺跡調査報告』久居市教育委員会、1980.3

②「上野遺跡だより」NO4久居市教育委員会2001.3

③―久居市―『三重の中世城館』三重県教育委員会、1978、11

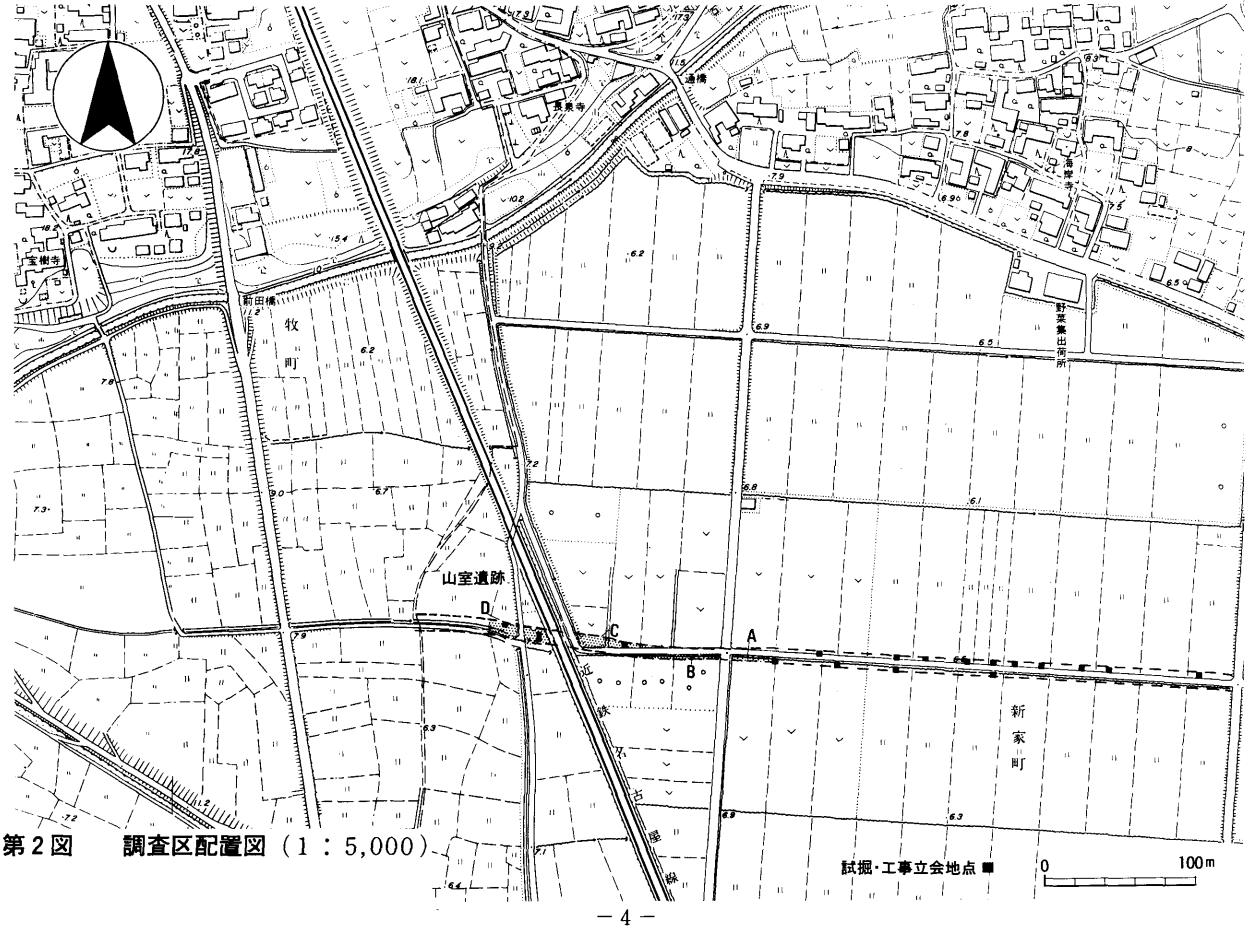
④萩原義彦『森南田遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、2000.3を参考、以下も同じ

⑤辻富美雄『戸木城址発掘調査報告』久居市教育委員会1979.3

⑥吉水康夫『本宮遺跡試掘調査報告』本宮遺跡調査会1973.2

⑦新家村「三重県の地名」『日本歴史地理大系24』、平凡社1983.5

⑧福田哲也、西村美幸『平生遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、1994.3



第2図　調査区配置図（1：5,000）

Ⅲ　層序と遺構

1　層序

調査区は水田地帯の微高地または自然堤防上に位置する。以下、Ａ地区～Ｄ地区の基本的な層序を順に記述する。

第１層は暗褐色土（表土）、第２層黄灰褐色土（床土）、第３層灰褐色砂質土（基盤層）が堆積しており、第３層上に中世の遺構が認められた。Ｂ、Ｃ地区の第２層上には一部砂層が介入していた。

2　遺構

Ａ地区とD地区で確認した遺構は溝が８条、掘立柱建物１棟、土坑７基である。なおＢ、Ｃ地区については削平が広範囲におよび遺構を確認できなかった。以下、順に記述する。

［平安時代～鎌倉時代］

この時期の遺構が大半を占め、Ａ地区西側のＳＤ５～７では山茶碗が多量に出土した。なお、Ａ地区確認の遺構番号は12までである。以降はＤ地区で確認した遺構である。

(1) Ａ地区

溝ＳＤ１　A～B6グリッドで検出した遺構である。基盤の土質と判別しにくく苦慮したが、僅かに暗灰色の砂が混じる埋土で、山茶椀（1）が出土した。両肩部分には遺構に伴う同方向のピット列を確認した。遺物は認められなかった。

溝ＳＤ２　Ａ～Ｂ５グリッドで確認した。上記のＳＤ１に対して90°南に振れる遺構である。南壁付近から陶器捏鉢（9）が出土した。

土坑ＳＫ３　Ｂ６グリッドで検出した。ＳＤ１と重複する。深さは0.6mを計る。検出は不明瞭であったが、断面からＳＤ１の埋没後に掘削されていると判断した。埋土から山皿（10）、山茶椀（11）が出土した。

土坑ＳＫ４　Ｂ６グリッドで検出した。埋土は一括して埋まっておらず分層された。遺物は小片で時期決定はしにくいが、少なからず機能していた時期に幅があると考えられる。

溝ＳＤ５　Ａ～Ｂ８グリッドで検出した。北側の高所から南へ流れる。埋土は粗砂混じりの褐色土が特徴で、底部ほど黒っぽく変色する。これらから山茶椀（19～31）が多量に出土した。これらは全面にわたって分布している。

溝ＳＤ６　ＳＤ５の西側で検出した。埋土にＳＤ５と同様の粗砂が混じっていた。同時期の土器が出土している。

溝ＳＤ７　ＳＤ５とＳＤ６の間で検出した。両肩部分の地山が不明瞭で確認しずらかった。底部から多量の山茶椀（50～76）が出土した。時期的にはＳＤ５、６に比較すると若干新しいとみられる。

土坑ＳＫ８　Ｂ８グリッドで検出した。ＳＤ６、７の掘削時に確認した。東西２ｍ、南北2.5m以上で、深さ0.4mの不定形な楕円形を呈する。山茶椀（78）が出土した。

土坑ＳＫ９　A･B９グリッドで検出した。東西0.5m以上、南北0.8mで深さ0.24mの小規模な遺構である。西側への広がりは調査区の制限から不明である。埋土に炭化物が混入していた。陶器椀が出土しているが、小片で詳細な時期決定はできていない。

土坑ＳＫ10　平面上の検出はしづらく、南壁断面で形状が確認できた。調査区の制約から全体形は不明である。規模はすべて推定で、東西３ｍ、南北1.5m以上、深さ0.4mである。山茶椀・山皿土師器鍋（87～95）と鉄釘（126～136）を確認した。

土坑ＳＫ11　B6グリッドの南壁で検出した。上記のSK10に比較すると浅い遺構である。底部から完形の鉄鎌（137）と鉄釘（139～155）が出土した。一部の釘は十字に重なって検出している。

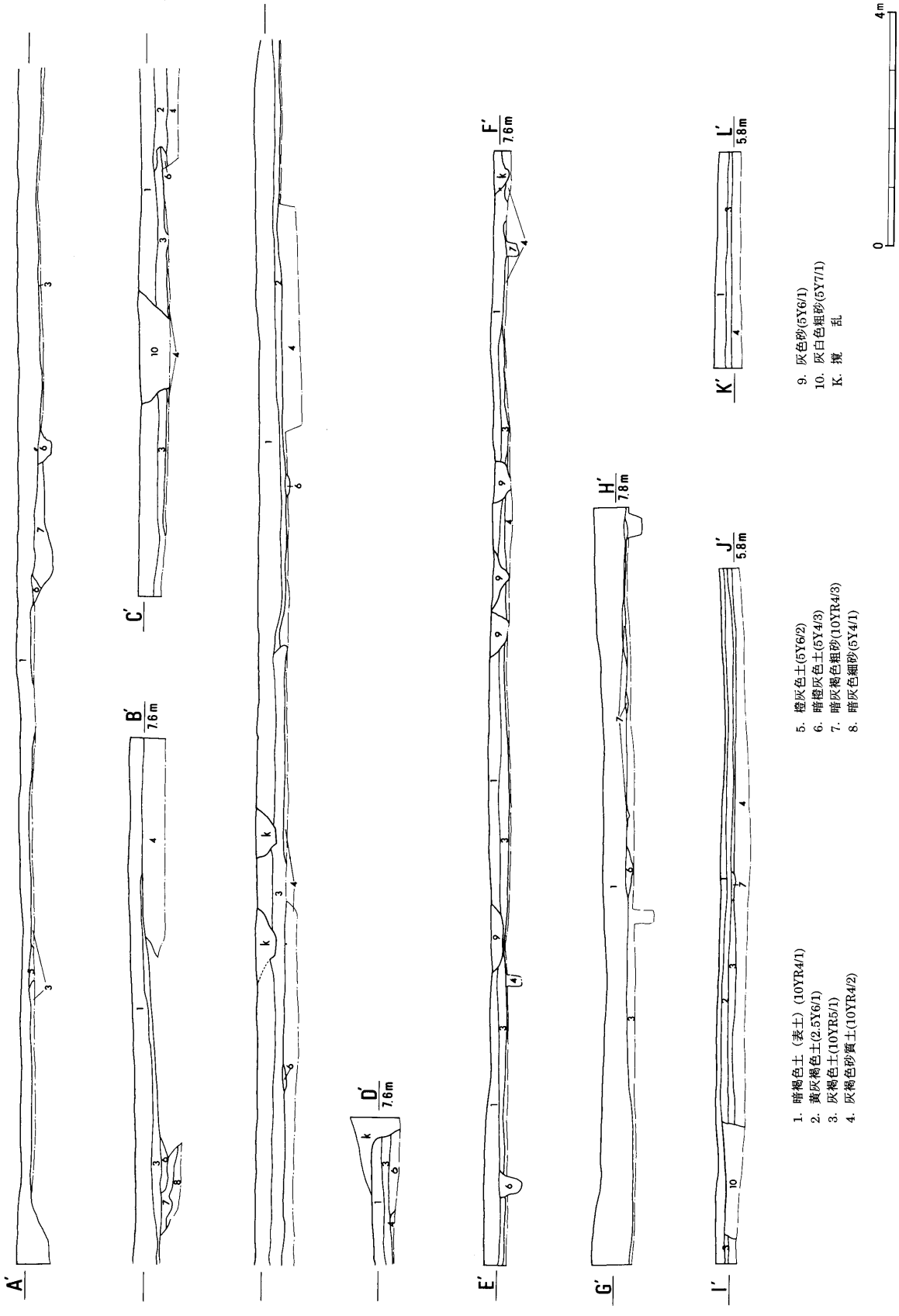
溝ＳＤ12　A～Bの2～4グリッドで検出した。上記の11とほぼ同時期で埋土は粗砂混じりの褐色土である。

(2) Ｄ地区

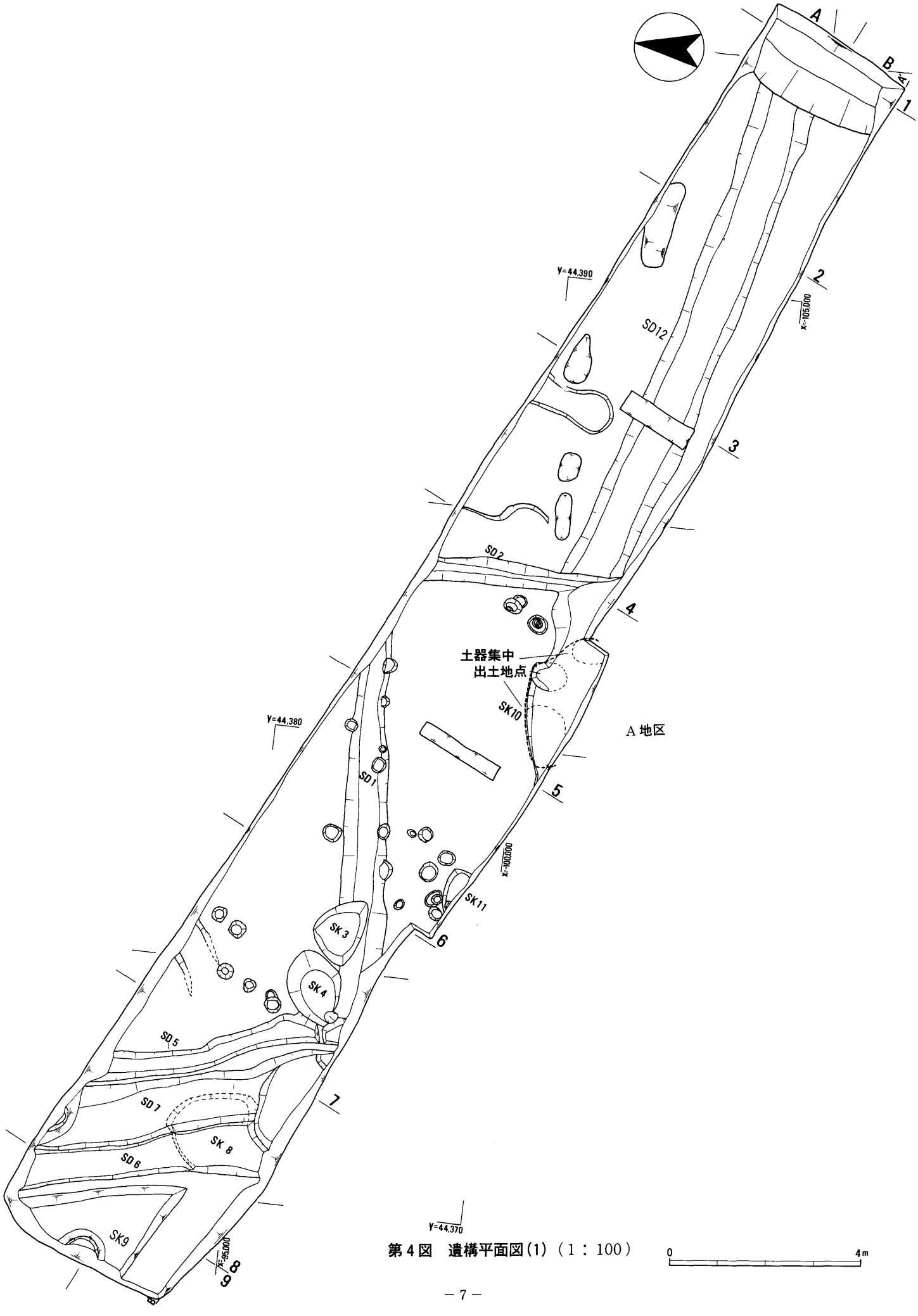
溝ＳＤ13　A50～51で確認した。現在の畦畔と同方向に流れる遺構で、幅0.4m、深さ0.2mである。土師器皿が出土した。

溝ＳＤ14　A51で検出した。上記の13と直交方向に流れる。規模、遺物ともに同時期のものが出土した。

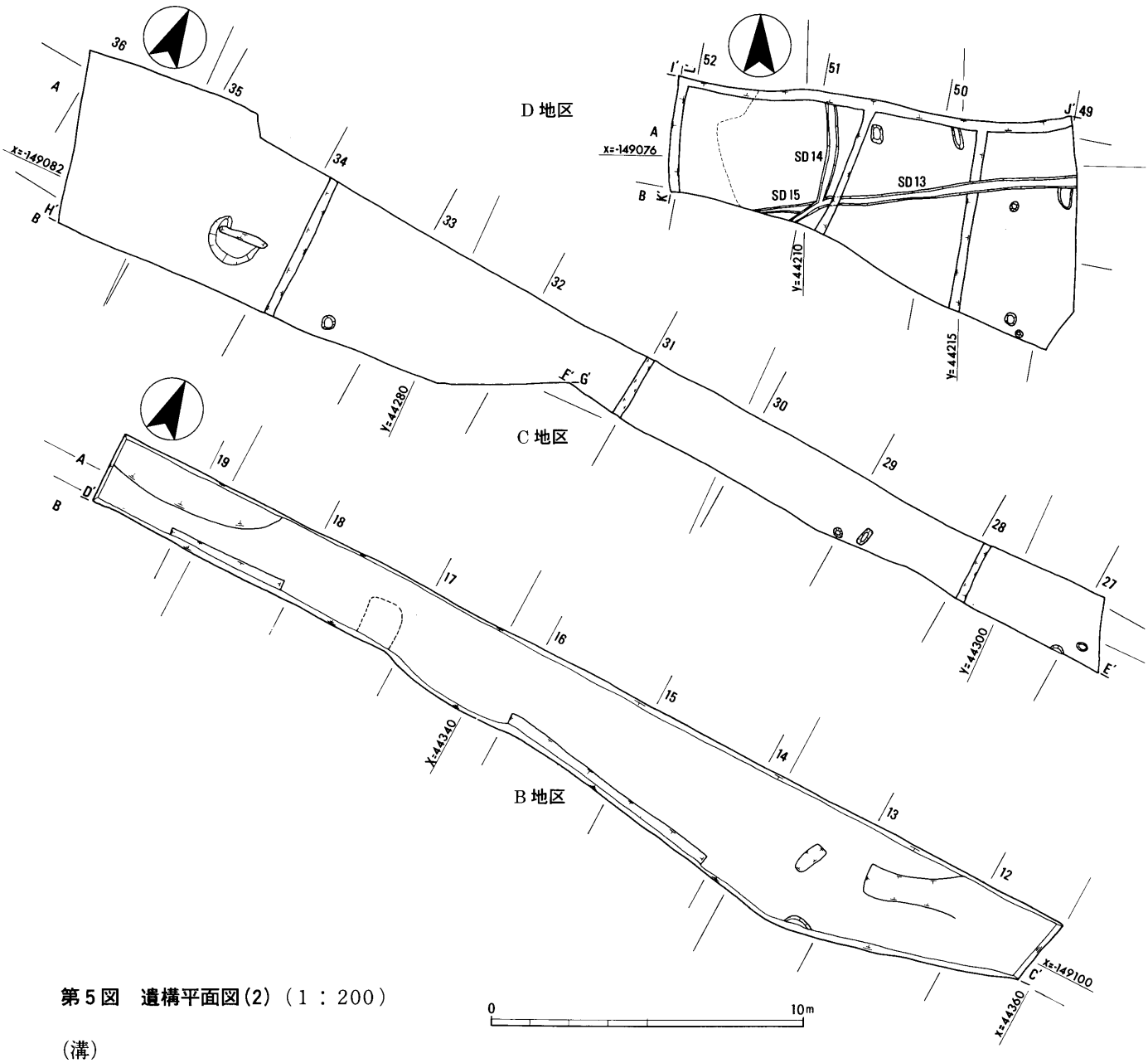
溝ＳＤ15　B51で確認した。13と平行して流れる。南端は現在の用水路に重複する。



第3図　土層断面図（1：100）



第4図　遺構平面図(1)（1：100）



第５図　遺構平面図(2)（１：200）

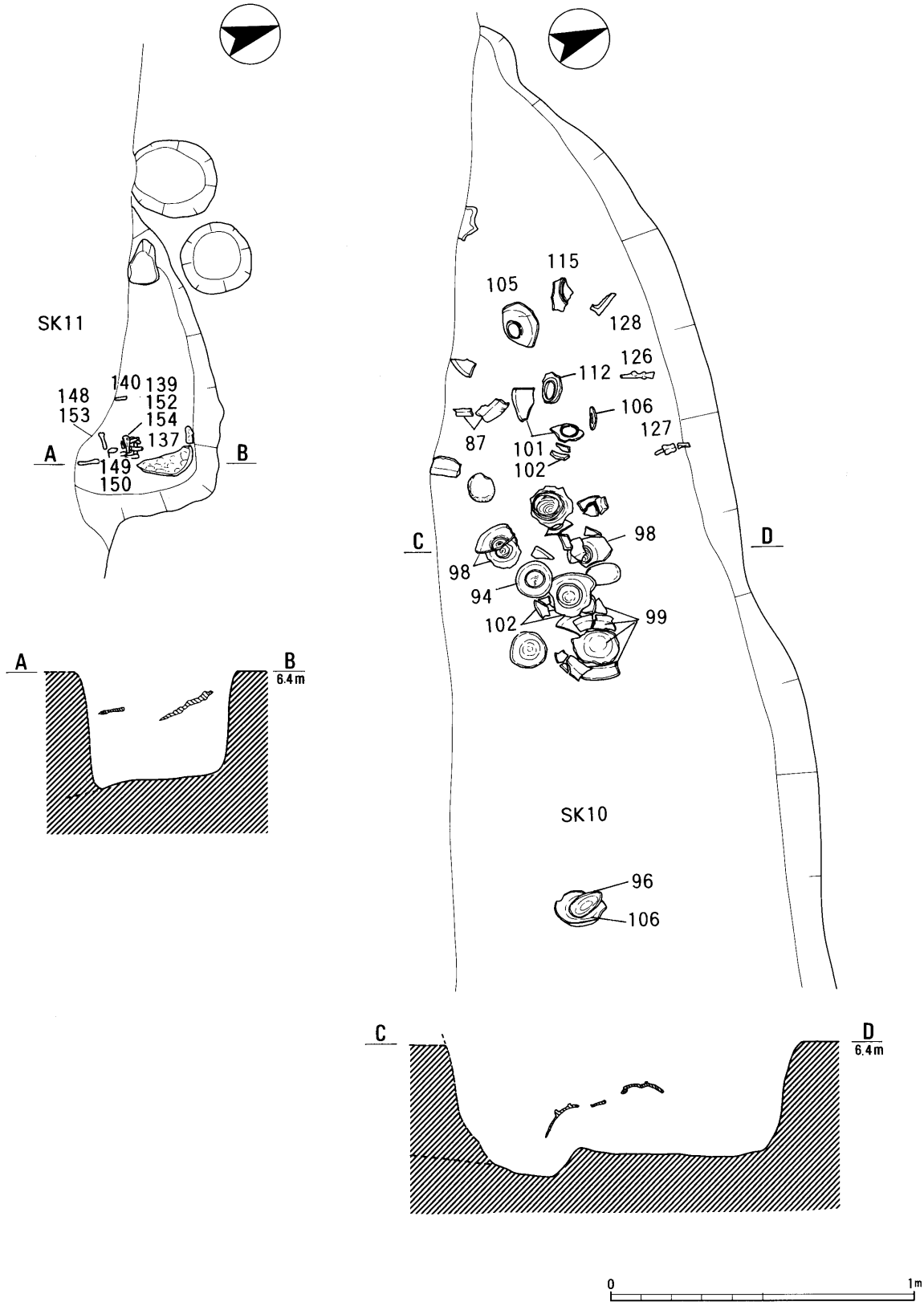
(溝)

遺構番号	規模			方向・形態	時期	遺物	備考
	長さ（m）	幅（m）	深さ（m）				
ＳＤ１	9	1.2	0.5	東西	平安末～鎌倉初	土師器杯	
ＳＤ２	5	0.7	0.3	南北	鎌倉中期	土師器甕	
ＳＤ５	6.2	0.8	0.5	南北	鎌倉中期	山茶椀	
ＳＤ６	1.3	6.5	0.5	南北	鎌倉中期	山茶椀	
ＳＤ７	7.8	1.4	0.4	南北	鎌倉中期	山茶椀	
ＳＤ13	9.5	0.4	0.2	東西	鎌倉後期	土師器・陶器	
ＳＤ14	3	0.4	0.2	南北	鎌倉後期	土師器・陶器	
ＳＤ15	2.5以上	0.3	0.2	東西	鎌倉中期	陶器	

(土坑)

遺構番号	規模			方向・形態	時期	遺物	備考
	長さ（m）	幅（m）	深さ（m）				
ＳＫ３	1.6	1.2	0.6	不定形	平安末～鎌倉初	土師器甕	
ＳＫ４	2	1.4	0.7	楕円	平安末～鎌倉初	山茶椀	
ＳＫ８	2.5	2.2	0.4	南端部欠	平安末～鎌倉初	土師器甕	
ＳＫ９	0.8	0.5	0.24	検出不明瞭	平安後期	灰釉椀	断面で確認
ＳＫ10	3.0	1.5以上	0.4	検出不明瞭	平安後期～	山茶椀・釘	断面で確認
ＳＫ11	1.3	0.6	0.4	検出不明瞭	平安後期～	山茶椀・鎌	断面で確認

第１表　遺構一覧表



第6図　ＳＫ10・11遺物出土状況図（1：20）

Ⅳ 遺　物

はじめに

出土した遺物はコンテナバットに22箱である。平安時代、鎌倉時代の土坑や溝から出土した遺物が大半である。出土遺物は、土師器鍋、山茶椀、鉄製品が主である。順に記述する。なお包含層遺物のなかに特徴的なものがあるので加えて記述する。

ＳＤ１出土遺物

山茶椀　(1～3) はどれも口縁部を欠く。どれも底径が10cm内外と大型品である。胎土は並であるが、丁寧な調整が施されている。藤澤氏の編年の第Ⅲ-６型式期ころに相当する。[1][2] どれも渥美産である。

ＳＤ２出土遺物

山茶椀　(４・５) は常滑産の品である。残存率は他の遺構に比べ良好である。(4)は(5)より口径は小さめである。(5)の高台端部は(4)より若干外方に張り出し安定する。

(6～8) の口縁部はどれも欠損していて端部の形状は不明である。高台部はどれも扁平で端部はナデられ八の字に開く。第Ⅲ-７型式頃のものとみられる。

陶器捏鉢　(9) は大型品で推定口径は28cm以上になると思われる。器厚は、底部で1.5cmとやや厚みがある。高台部は上部から真下にナデられ、端部は丸く収められている。

ＳＫ３出土遺物

山皿　(10) はＳＤ２と同時期のものである。底径は3.4cmと小型品である。

山茶椀　(11) は上記の (4～8) と同時期のものである。高台部は接合面から下に１～２mmと僅かに貼り付け後ナデられているだけで、平底である。

ＳＤ５出土遺物

土師器皿　(12・13) は上層の混入品であると考えられる。底部から口縁へはやや外反気味に立ちあがり、端部は丸く収められる。胎土はやや密で残存率も良好である。

(14～16) は小皿である。(14・15) はともに底～体部にかけての屈曲部の立ち上がりがやや外反気味である。端部は、丸みを帯びる。(16) は上記の２個体に比べて扁平で、底部からの屈曲はほとんどなく、斜め上方に延び、端部は丸められている。

土師器鍋　(17・18) は調査区内では一番口径の大きいもので、口径22cmを計る。どちらも平安後期初頭ころの所産である。

(17) の口縁部は厚く、頸部から外反気味に立ち上がり、端部は内側に折り返されて、丸く収まる。外面に分厚く、煤が付着している。

(18) は (17) に比較すると若干薄手で、口縁部は内側に折り返されたあと、強く上方向から指ナデされて、屈曲部が上方に突き出る。

山茶椀　(19～21) はどれも、外面のナデ調整は丁寧で、胎土も密である。常滑産であろう。(19) よりも (21) のほうが時期的にはやや下る時期に相当すると考えられる。

(22～31) は遺構内に広く散布していた遺物である。口縁部はどれも欠損していて口径は不明である。(22～25) は高台内面が緩く右下方に下がり、外面に垂直な面を持たせている。(28・31)は底部の断面が三角形を呈する。

ＳＤ６出土遺物

土師器皿　(32・33)はともに底部から口縁への立ち上がりがゆるく丸みを帯びる。胎土は密で丁寧に造られている。

土師器鍋　(34・35)は15世紀の範疇でとらえられるものであるが、(34)の器厚は(35)と比較すると薄手である。

山皿　(36)はほぼ完形の遺物である。底部から口縁への屈曲は直線的で端部は丸められている。底部の厚みは0.8mmである。既述の(10) と同時期である。

山茶椀　(37～42)は渥美産である。(37)はどちらかというと高台内側端部が下方に突き出るタイプである。底部の断面は厚く、1.5cmを計る。

(41・42)は高台部は扁平な逆台形を呈する。藤澤編年の第Ⅲ―７型式期に相当する。

陶器鉢　(43)の外面はナデ調整され、丁寧に造られている。胎土に少量の小石が含まれている。口径が20cm以上の大型品と推定される。

ＳＤ７出土遺物

土師器皿　(44・45)はともに残存状況が良好で

ある。底部には指オサエ後に明瞭なナデ調整が施されている。ＳＤ５出土の（12･13)と同時期の遺物と考えられる。

土師器鍋　(46) は南伊勢型鍋である。口縁は外反して端部は内側に強く摘み上げられる。部分的に欠落している。第３段階の後半期に属する[3]。

山皿　(47)は底部残片である。底径が3.6cmと非常に小さい品である。上記（41～42）と比較すると高台は扁平で安定する。(48 ・ 49) はどちらも渥美産である。

山茶椀　(50～76) までは遺構内の暗茶褐色土上で出土した。これらには番号を付け、地点と絶対高を計測した。以下、高台部の形状に特徴がみられるので記述する。

(50) は底部からの立ち上がり角度は直線的で丁寧にナデられている。口縁端部は上方向に摘み上げられている。高台部は逆台形状に仕上げられている。口縁が欠損しているが同一形状と思われるものには (52 ・ 56 ・ 69 ・ 71) が挙げられる。

(56 ・ 69) の高台下端部は平らで、右端はやや外側に張り出す。

(51 ・ 55 ・ 64) の高台は貼り付け後ナデられ、下端部は外反して突き出す。

(53 ・ 57 ・ 58 ・ 62 ・ 66 ・ 67) は (50 ・ 56) のように逆台形状は呈せず、台部の厚みも～ 3mmまでに収まり、右端部がやや外へ押し出される。

(63 ・ 74) はそれらとは逆に左端部が下方に引き出され、接点を作る。

青磁椀　(77) は体部は上方に向かって開き、口縁部は下方に折り返されて端部は丸みを帯びる。

ＳＫ８出土遺物

山茶椀　(78) は残存率が良く完形に近い。高台は特徴を有し、底部外面から立ち上がりへの変換点に貼り付けられている。ハの字型に開き、端部は丸く収められる。(79～81) は台部も低く安定している。(79) は屈曲部からやや内方に入った箇所に台部が貼り付けられている。

ＳＫ10出土遺物

瓦器皿　(82) は唯一の瓦器皿である。体外面下半部に丁寧なオサエが施されている。内面には縦方向のヘラミガキが施されている。

土師器皿　(83 ・ 84) のうち (84) は体部外面下半に粗いオサエが施されている。口縁は直線的に立ち上がり、端部は外反して、下に若干の段を作り出す。

土師器甕　(85) は平安後期末の土器群の消長期にみられるもので伊藤氏編年でいう（仮）Ａ段階に相当する[3]。体部でやや器厚が増し、頸部で緩やかに外反する。口縁端部はナデられ、丸められている。

土師器鍋　(86～93) は口縁部残片であるが各段階の特徴を示し、かつ時期差がある品である。４段階にみられる口縁端部外面への強いナデが施される品は観察されない。概ね (86～88) のように端部の上面にヨコナデを施すものと、口縁内面の折り返し部分が三角形となる (89～93) が頸部で外方に屈曲し、口縁端部は上方に細く摘みあがる。伊藤氏編年の第４段階に相当する。

山皿　(94～96) はいずれも完形である。口縁部はやや厚みを持たせながら若干外反し、端部は丸く収まる。(97) の口縁部は欠損している。(94 ・ 95) は底部端で受口状になる。どれも第３－７型式期に属する。

山茶椀　(98～123) のうち (98～111) は口縁部の残存、他は底部の残片である。(98 ・ 110) は器厚が薄く、外面は体上部の屈曲点が若干の稜を形成している。(104 ・ 110) の口縁端部は上面からの強いナデにより外下方に丸く収められている。(113～115) は高台は下方というよりやや外方に突出する形状を呈し、端部は突出している。(117～123) は台高も低く、２～３mmを計る。

土師器甕　(124) の口径は21cmを計る。口縁端部はヨコナデが施され、若干の窪んだ幅広い沈線を形成している。

瓦器椀　(125) の口縁内側に沈線があり、外面のミガキは鈍く残る程度である。横方向のミガキは口縁上端には及んでいない。山田猛氏の編年ではⅢ段階の前半期の範疇で捉えられる[4]。

鉄釘　(126～136) のうち (126 ・ 128 ・ 129) はほぼ完形で、長さは各々 7.5cm、8.0cm、8.2cmである。(128) には頭部に長さ約 2.0cm、幅約 1.0cm、厚さ約 0.5cmの木質が良く残る。(127) は２本がL字状に銹着しており、いずれも頭部が欠損している。(130) は頭部が欠損している。残存長 6.1cmを計り、全体に木質が付着している。(131 ・ 132 ・ 133) は銹化が激しく本来の形が確認しにくいが、頭部片であると思われる。(130 ・ 135) は木質が良く残る。各個体の計測値は後の観察表に整理し、記述した。

ＳＫ11出土遺物

鉄鎌・鉄釘・用途不明品　(137) の鉄鎌が１点、(138) の不明品が１点、鉄釘 (139～155) が 17 点出土した。詳細は後の表に記述した。

ＳＤ 12 出土遺物

陶器鉢　(156) は土師質風の陶器である。体～底部は左下方に緩いカーブでナデられて整形されている。

土師器鍋　(157) は小片であるが時期決定できる唯一の遺物である。いわゆる南伊勢系土師器に分類される。全体の計測値は不明である。口縁端部が強いヨコナデにより上方に突出し、屈曲部が「く」の字を崩した形状となっていることから時期的には伊藤氏編年の第４段階ｄ類前後に相当する。

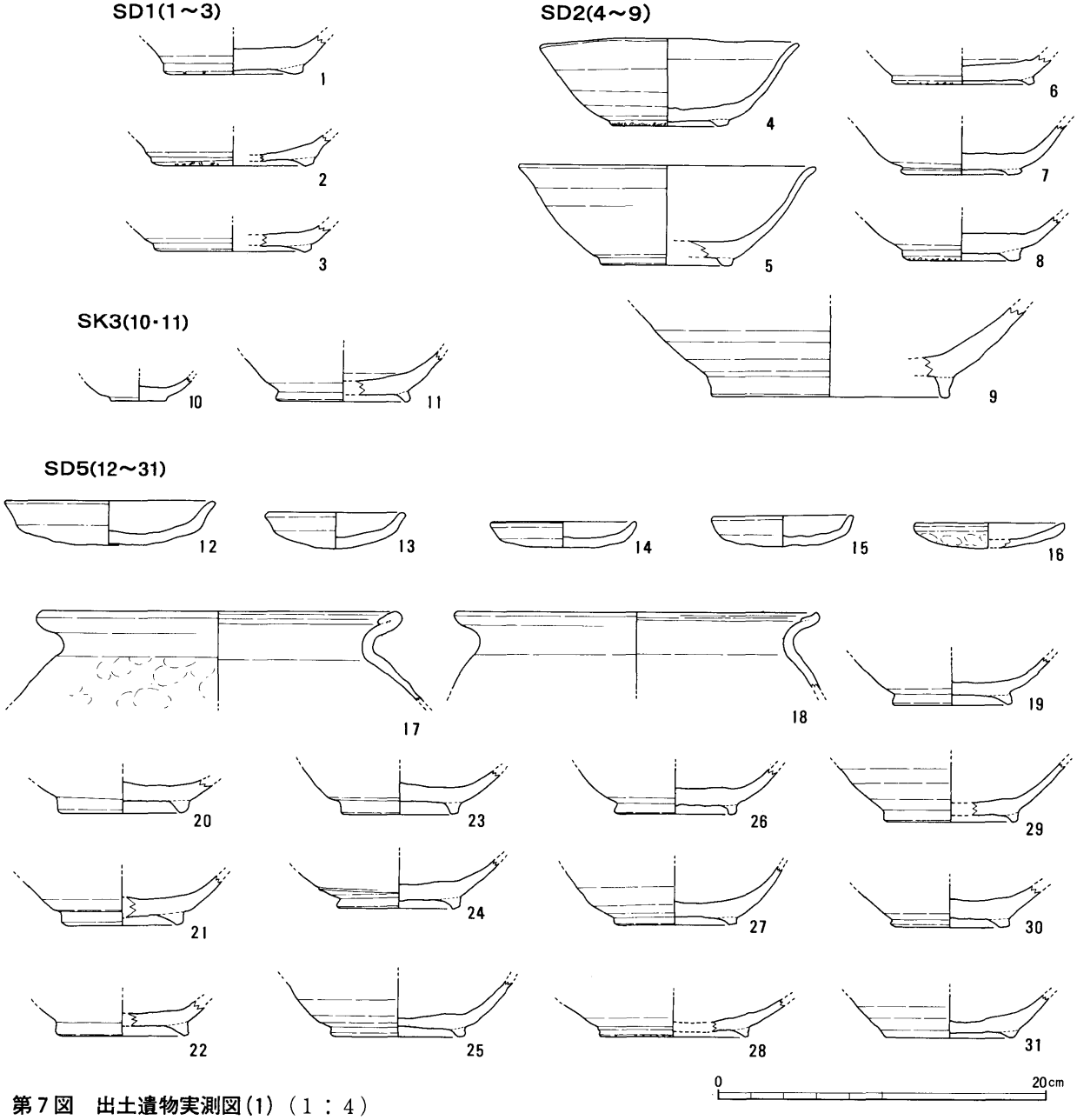
pit 出土遺物

土師器鍋　(159・160) の折り返し部分は断面三角形を呈するが、折り返し全体の摩滅は激しい。ＳＤ 12 のものとは遡る同編年第２段階頃に比定できよう。

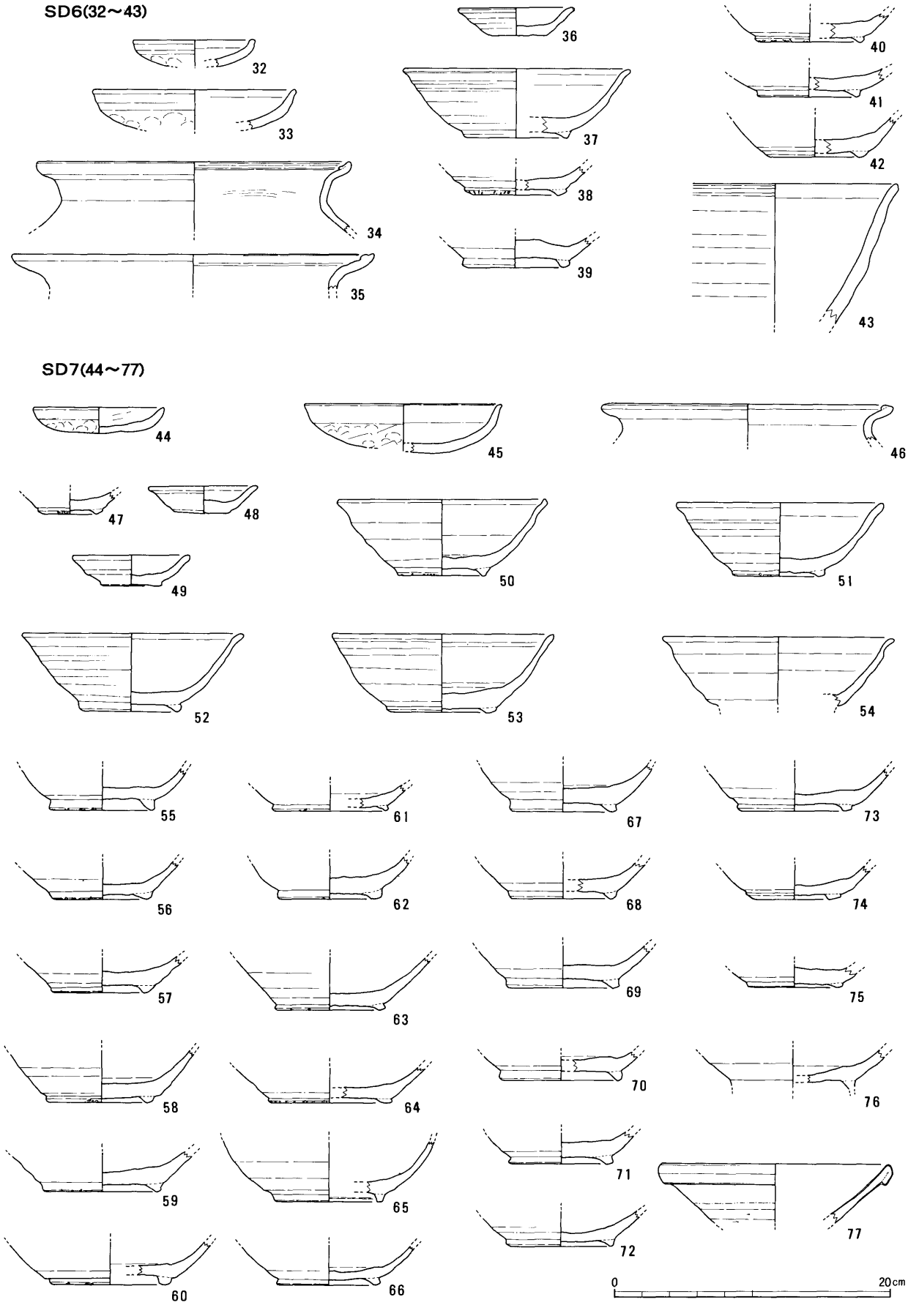
山茶椀　(161・162) のうち (162) は完形である。高台部は扁平な逆台形を呈し台高は低い。

Ａ・Ｂ・Ｃ地区包含層出土遺物

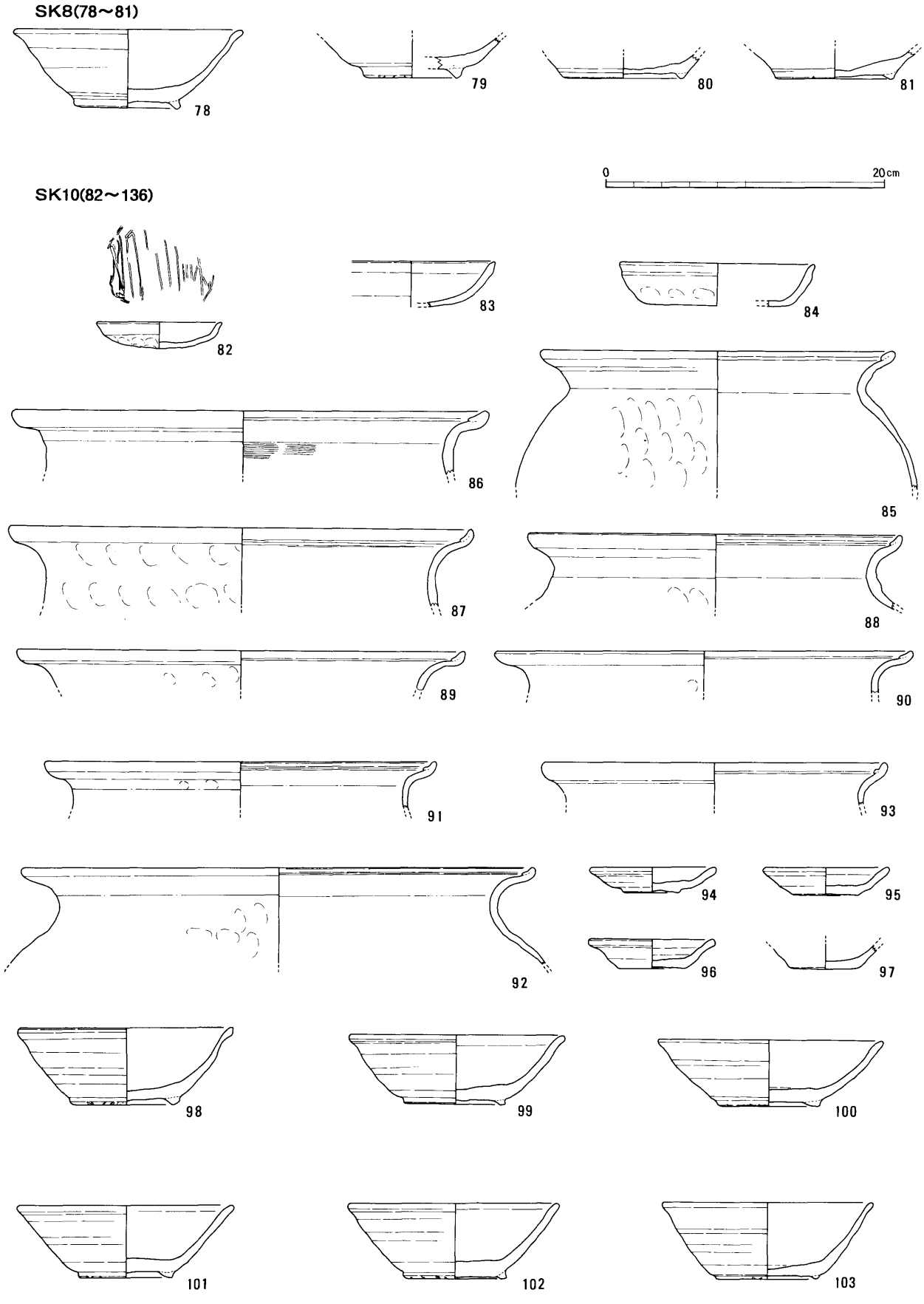
土師器羽釜　(169) は口径は小さく 22cm を計る。口縁端部の形状は不明である。突帯部の厚みと調整



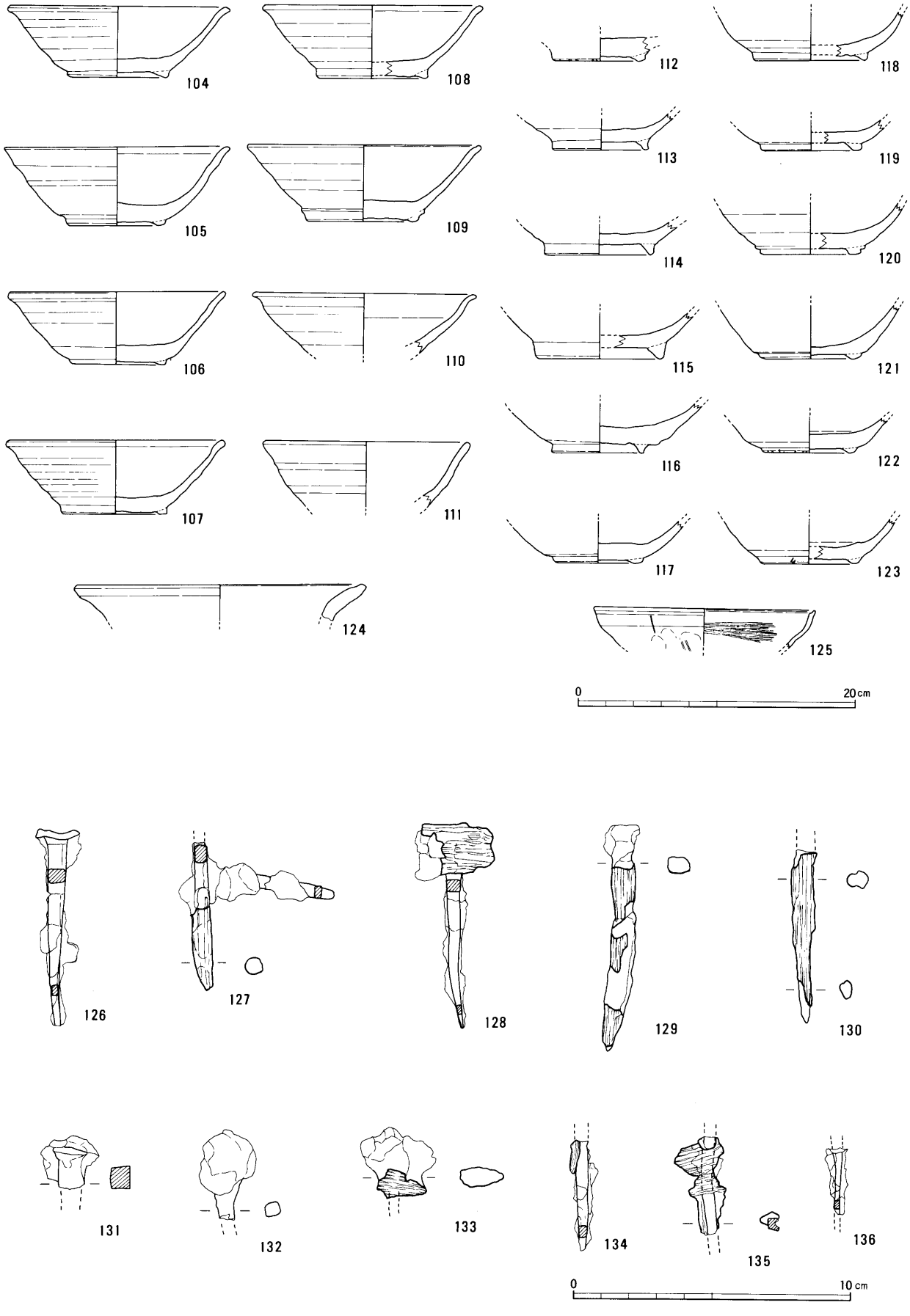
第７図　出土遺物実測図(1)（１：４）



第８図　出土遺物実測図(2)（１：４）

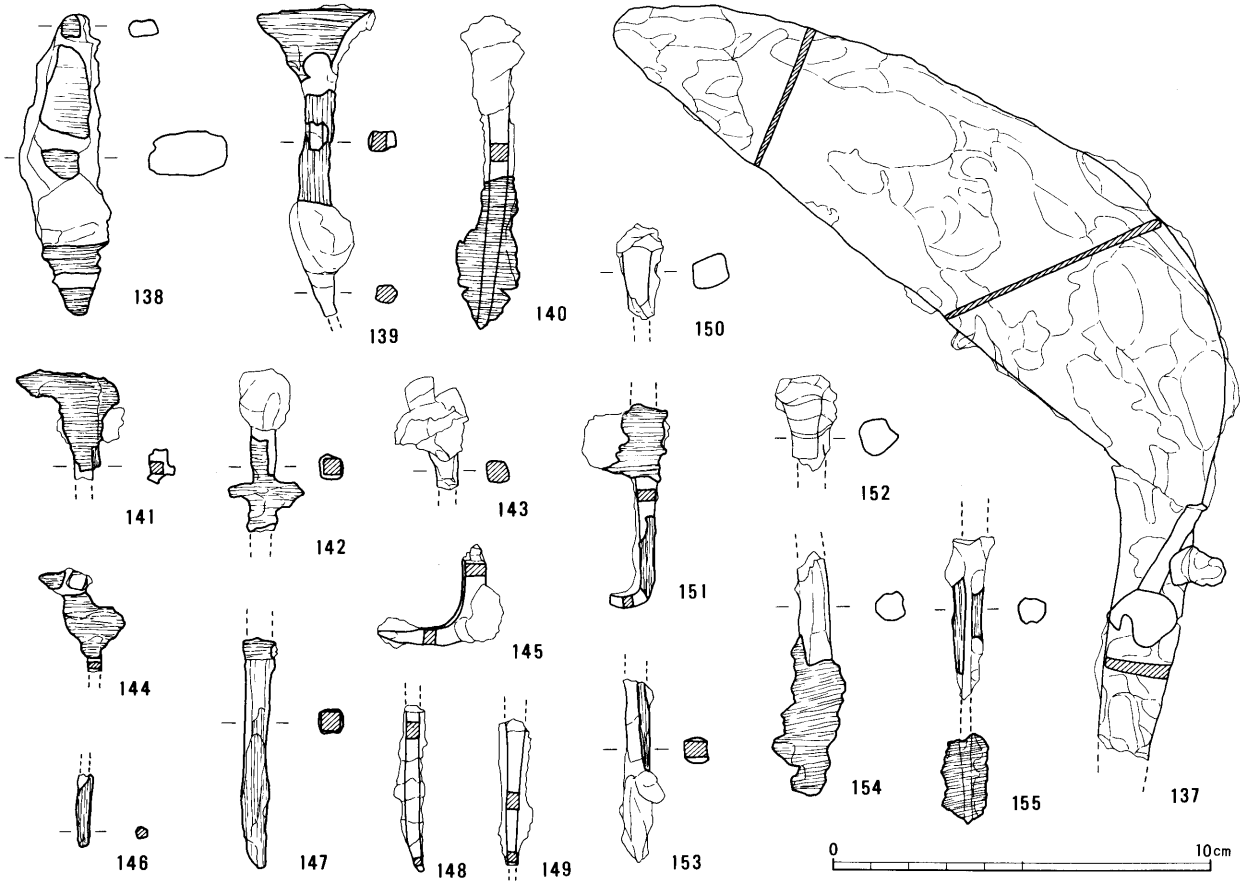


第９図　出土遺物実測図(3)（１：４）

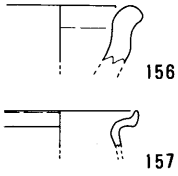


第10図　出土遺物実測図(4)（104～125は1：4、126～136は1：2）

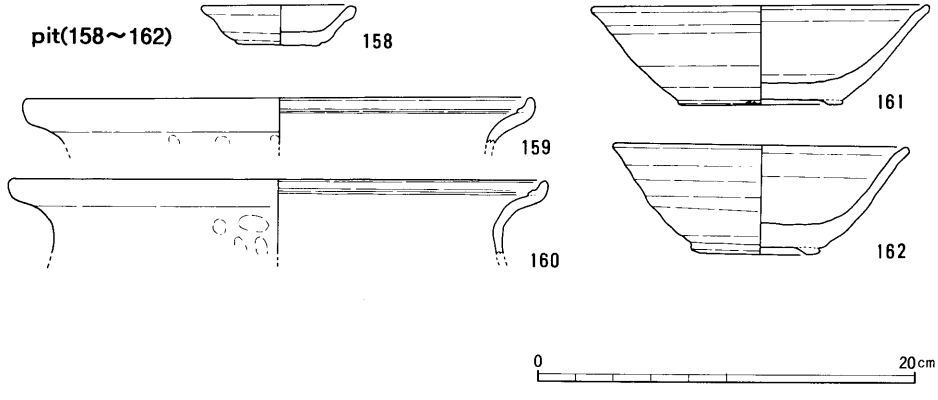
SK11(137～155)



SD12(156･157)

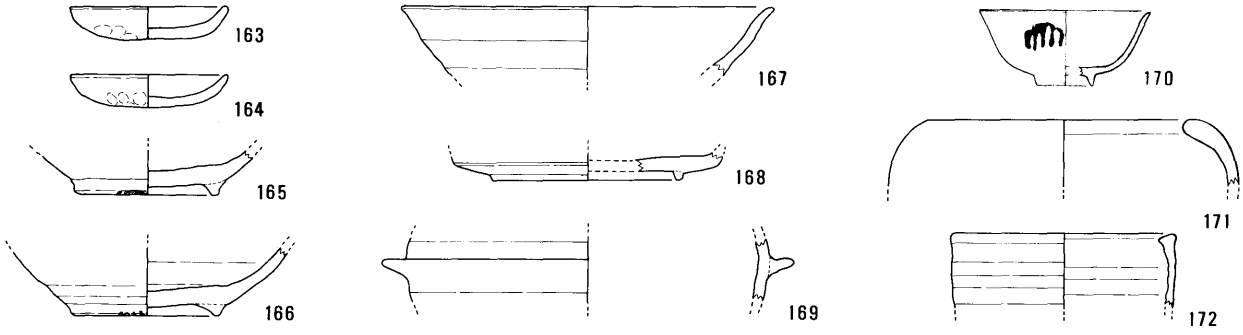


pit(158～162)

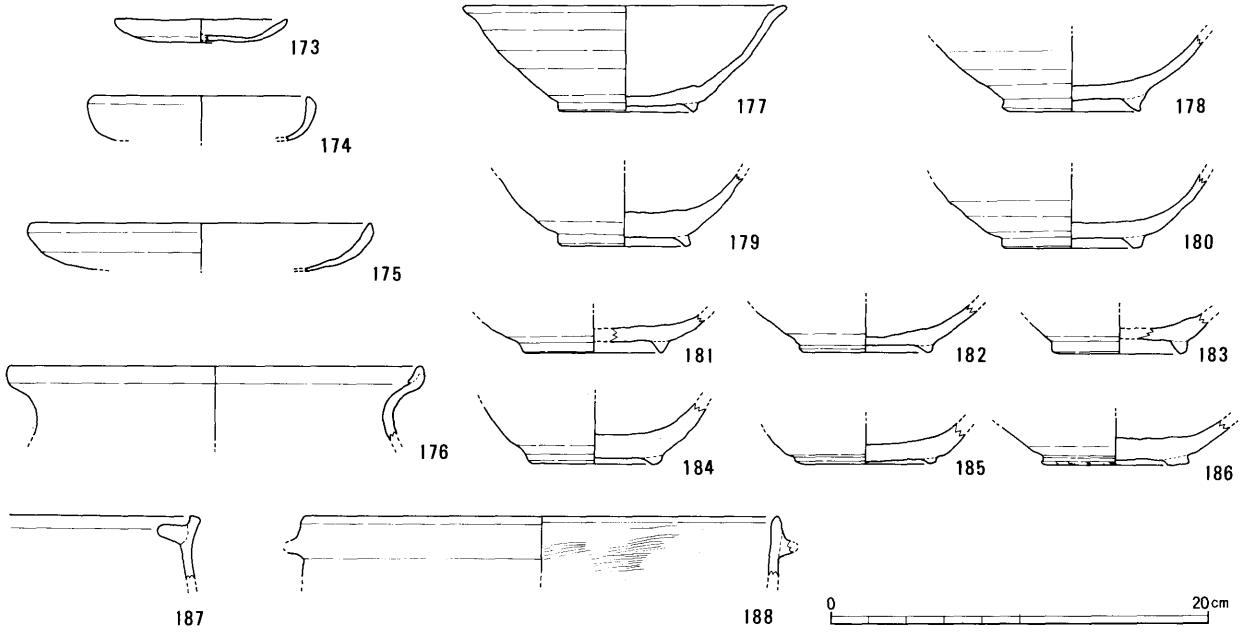


第11図　出土遺物実測図(5)（137～155は1：2、156～162は1：4）

A地区包含層(163～172)



B地区包含層(173～187)



第12図　出土遺物実測図(6)（1：4）

から同編年１段階期に該当するであろう。

陶器鉢　(171) は口径12㎝で、当遺跡内では良質の施釉がなされている品である。おそらく火鉢であろうが用途は限定できない。

土師器皿　(175) はＳＤ５の検出面で確認したが包含層中に含めた。口径は17.5㎝を計る。扁平で器厚は2.4㎝弱であろう。調整は丁寧な品である。

土師器鍋　(176) は頚部以下の内外面の調整が不明瞭なため時期断定はしにくいが、折り返し断面が三角形を呈しない、同編年の第１段階の範疇で捉えられる。

焙烙　(187) は唯一焙烙と認められる遺物である。口縁部内側に貼り付けによる突出部が作られ、内方端部はナデられやや膨らむ。上に蓋がつく器種であろう。

土師器羽釜　(188) は器厚は薄く、６㎜を計る。口縁直下の内面で明瞭なオサエ痕が認められる。

Ⅴ　結　語

１　ＳＤ５・６・７の出土遺物について

ＳＤ５～７の遺物は、検出面から10cm下の埋土中の暗褐色土から出土した。これらは集中というよりは遺構全体にまばらな状態で出土した。土器は山茶椀が大半を占め、40点を数える。これに数点の土師器皿が含まれていた。山茶椀は口縁部を欠き、体部～高台部にかけて残存しているものか、あるいは底部のみ残存するもので、その向きは、底を上向きにした状態で出土している。このことからこれらの溝は、若干微高地にあたる北側から南にむかって流れたと考えられる。

２　ＳＫ10およびＳＫ11の性格と鉄製品について

ＳＫ10は遺構埋土の土壌化がすすんでいたため、検出面は切り会い不明瞭で断面で輪郭をようやく把握するにとどまった。深さは0.6mである。壁面は焼けていない。平安時代後期末ころの土師器や瓦器も上面で混入するものの概ね伊藤氏編年の第４段階期が妥当な時期であろう。釘は土器よりも比較的上層で多く出土した。12点のうち木質が７点に認められ、58%を占めた。その方向は平行あるいは直行であった。

ＳＫ11は調査区の制約から北側半部の確認となった。規模は1.3×0.6m、深さは0.4mの単独土坑である。壁面は焼けていない。土器は微細で時期を断定できなかったので省略したが、おそらくＳＫ10と同時期であるとみられる。鉄製品は、釘が計18点中14点で77%に木質が確認できた。釘は両遺構総計で30点を数える。が形状から特徴を観察すると、厚さが平均0.5cmで、断面は錆びのため変形しているものの比較的残存状況の良好な139・142・143・147・153の様に角釘である。出土点数の多い釘が微細な炭化物の混じる単一層中の上面で十の字に重なって出土した。他は底近くで確認した。土器を含めて遺構の底に据えられた状態の遺物は確認していない。調査区外でも鉄製品が埋没している可能性は高い。他に完形に近い鎌が１点と川原石が１点底近くで出土した。

これらのことから両遺構の性格については、鉄釘や鉄鎌と山茶椀・土師器等が同一遺構内に埋められていたので、埋納遺構に関連するものであり、鉄製品は二次的な要因から補強材に使用したものとみられる。両遺構では鉄釘・鉄鎌と山茶椀・土師器等が同一遺構内から出土したが、これら共伴遺物は県内外の埋納遺構を有する遺跡で報告されている。例えば、県内では横尾墳墓群[5]（松阪市）や宮地中世墓群（多度町）が知られ、県外では日野大谷墳墓群（日野町）が挙げられる。このうち宮地中世墓群では総計60本の釘が確認されている。先端がL字状に曲げられる角釘で、しかも木質が付着しているものは48点（全体の80%）であった。木質の繊維の方向は平行が15点、直行が39点を数える。これらが陶器壺等と一括して出土しており、石組みで墓坑を囲む状態で検出されている[6]。

註）

① 中世瀬戸窯編年表等を引用、瀬戸市教育委員会編『尾呂』1990

② 藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第３号　三重県埋蔵文化財センター　1994.3

③ 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history』vol.1　1990.5

④ 山田猛「伊賀の瓦器に関する若干の考察」『中近世土器の基礎研究Ⅱ』中世土器研究会、1986

⑤ 田阪　仁・宮田勝功「横尾墳墓群」『佛教芸術』182号毎日新聞社　1989.1

⑥ 杉谷政樹『宮地中世墓群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1997.3

報告書番号	登録番号	出土位置	種類（器種）	器形	計測値（cm）		観察事項	色調	胎土	焼成	残存度	備考
					径	器高	形態・成形・調整技法の特徴					
1	005−05	ＳＤ１	陶器　山茶椀	底部	8.4	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白　2.5Y7／1	やや密	良	底部:2／3	籾殻痕・糸切痕
2	006−03	ＳＤ１	陶器　山茶椀	底部	8.6	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白　5Y7／1	やや粗（～３㎜の砂粒含む）	並	底部:4／1	籾殻痕・糸切痕
3	005−06	ＳＤ１	陶器　山茶椀	底部	9.4	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	にぶい黄橙　10YR7／2	やや密	並	底部:1／3	糸切痕
4	005−01	ＳＤ２	陶器　山茶椀	体部欠損	□15.0～16.3	4.6～5.3	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白　5Y7／1	やや密	良	口縁:2／3	籾殻痕・糸切痕・内面に自然釉
5	005−04	ＳＤ２	陶器　山茶椀	体部欠損	□18.0	6.1	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白　5Y7／1	やや密	良	口縁：小片	
6	006−02	ＳＤ２	陶器　山茶椀	底部	7.8	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白　5Y7／1	やや密	並	底部:1／3	籾殻痕・糸切痕
7	005−02	ＳＤ２	陶器　山茶椀	底部	7.4	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白　2.5Y7／1	やや密	良	底部完存	糸切痕
8	005−03	ＳＤ２	陶器　山茶椀	底部	7.2～7.6	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白　2.5Y7／1	やや密	良	底部完存	籾殻痕・糸切痕・墨痕
9	006−01	ＳＤ２	陶器　摺鉢	底部	14.2	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・ロクロケズリ・貼付ナデ	灰白　5Y7／1	やや密（～1.5㎜の砂粒含む）	並	口縁：小片	
10	013−04	ＳＫ３	陶器　山皿	底部	3.3～3.5	—	内：ロクロナデ 外:ロクロナデ・ナデ	灰白　2.5Y7／1	やや密	並	底部完存	糸切痕・内面に自然釉
11	013−06	ＳＫ３	陶器　山茶椀	底部	8.1	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白　2.5Y7／1	やや密	並	底部:1／4	糸切痕
12	007−10	ＳＤ５	土師器　皿	体部	□12.5	2.7	ナデ・ヨコナデ	浅黄橙　5YR8／4	やや密（～1.2㎜の微砂粒含む）	並	口縁わずか	
13	007−09	ＳＤ５	土師器　皿	体部	□8.0	2.2	ナデ・ヨコナデ	浅黄橙　7.5YR8／6	やや密（～1.5㎜の砂粒含む）	並	口縁:1／3	
14	007−11	ＳＤ５	土師器　皿	体部	□8.8	1.5	ナデ・ヨコナデ	浅黄橙　10YR8／4	やや粗（～1.8㎜の砂粒含む）	並	口縁:1／4	
15	007−08	ＳＤ５	土師器　皿	体部	□8.5	1.8	ナデ・ヨコナデ	橙　5YR7／6	やや密（～0.8㎜の微砂粒含む）	並	口縁:1／4	
16	018−03	ＳＤ５	土師器　皿	口縁部	□9.2	1.5	ナデ・ヨコナデ・オサエナデ	にぶい橙　7.5YR7／4	やや密（～1.5㎜の砂粒含む）	並	口縁:2／3	墨痕
17	018−01	ＳＤ５	土師器　鍋	口縁部	□22.1	—	ナデ・ヨコナデ・オサエナデ	灰白　10YR8／2	やや粗（～2.5㎜の砂粒含む）	並	口縁:1／8	外面に煤付着
18	018−02	ＳＤ５	土師器　鍋	口縁部	□22.1	—	ナデ・ヨコナデ・オサエナデ	にぶい褐　7.5YR6／3	やや粗（～1.5㎜の砂粒含む）	並	口縁:1／8	
19	020−01	ＳＤ５	陶器　山茶椀	底部	7.3	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白　5Y8／1	やや密（～1.0㎜の砂粒含む）	良	底部完存	
20	007−01	ＳＤ５	陶器　山茶椀	底部	7.2	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白　2.5Y7／1	やや粗（～2.6㎜の砂粒含む）	並	底部完存	糸切痕
21	007−06	ＳＤ５	陶器　山茶椀	底部	6.6	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白　2.5Y7／1	密（～2.0㎜の砂粒含む）	並	底部:2／3	
22	007−03	ＳＤ５	陶器　山茶椀	底部	7.4	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白　2.5Y7／1	密（～0.8微砂粒含む）	並	底部:1／3	糸切痕
23	019−06	ＳＤ５	陶器　山茶椀	底部	7.2	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白　5Y7／1	やや密（～3.0㎜の砂粒含む）	良	底部完存	糸切痕・内面に自然釉
24	020−02	ＳＤ５	陶器　山茶椀	底部	7.5	—	内：ナデ・ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白　5Y7／1	やや密（～1.5㎜の砂粒含む）	良	底部完存	糸切痕
25	007−02	ＳＤ５	陶器　山茶椀	底部	7.8	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白　2.5Y7／1	やや密（～4.3㎜の小石含む）	並	底部完存	
26	019−05	ＳＤ５	陶器　山茶椀	底部	7.5	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ・ナ	灰白　5Y7／1	やや密（～2.0㎜の砂粒含む）	良	底部完存	
27	019−01	ＳＤ５	陶器　山茶椀	底部	7.4	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白　2.5Y7／1	やや粗（～3.0㎜の砂粒含む）	良	底部完存	糸切痕・内面に自然釉
28	007−07	ＳＤ５	陶器　山茶椀	底部	8.8	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白　2.5Y8／1	やや粗（～2.8㎜の砂粒含む）	並	底部:1／4	籾殻痕
29	007−04	ＳＤ５	陶器　山茶椀	底部	7.8	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰黄　2.5Y7／2	やや密（～2.8㎜の砂粒含む）	並	底部:1／2	糸切痕
30	019−02	ＳＤ５	陶器　山茶椀	底部	7.2	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白　2.5Y7／1	やや粗（～1.5㎜の砂粒含む）	良	底部完存	
31	007−05	ＳＤ５	陶器　山茶椀	底部	7.8	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白　2.5Y8／1	やや粗（～2.5㎜の砂粒含む）	並	底部:1／3	
32	024−05	ＳＤ６	土師器　皿	口縁部	□8.8	—	ナデ・ヨコナデ・オサエナデ	にぶい黄橙　10YR7／4	やや粗	並	口縁:1／4	
33	018−04	ＳＤ６	土師器　皿	口縁部	□14.6	—	ナデ・ヨコナデ・オサエナデ	橙　7.5YR6／6	やや密（～1.5㎜の砂粒含む）	並	口縁:1／6	
34	025−02	ＳＤ６	土師器　鍋	口縁部	□22.6	—	ナデ・ヨコナデ	浅黄橙　10YR8／3	やや粗	並	口縁:1／6	ハケメ少し残存
35	024−02	ＳＤ６	土師器　鍋	口縁部	□26.0	—	ヨコナデ	黒褐　7.5YR3／1	やや粗	並	口縁:1／11	外面に煤付着
36	020−03	ＳＤ６	陶器　山皿	口縁欠損	□8.3　底:4.2	2.1	ロクロナデ・ナデ	灰　5Y6／1	やや密（～1.0㎜の砂粒含む）	良	口縁:1／4	糸切痕・内面に自然釉
37	019−03	ＳＤ６	陶器　山茶椀	体部欠損	□16.4　台7.4	5.0	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白　5Y7／1	やや密（～1.0㎜の砂粒含む）	良	口縁:1／4	
38	020−06	ＳＤ６	陶器　山茶椀	底部	7.3	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白　5Y7／1	やや密（～1.5㎜の砂粒含む）	良	底部:1／3	籾殻痕・糸切痕
39	025−06	ＳＤ６	陶器　山茶椀	底部	7.7	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白　N8／0	やや密	並	底部:1／2	糸切痕
40	019−04	ＳＤ６	陶器　山茶椀	底部	7.9	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白　5Y7／1	やや密（～1.0㎜の砂粒含む）	良	底部:1／4	籾殻痕
41	020−05	ＳＤ６	陶器　山茶椀	底部	7.4	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白　5Y7／1	やや密（～2.5㎜の砂粒含む）	良	底部:1／4	糸切痕
42	020−04	ＳＤ６	陶器　山茶椀	底部	7.3	—	内：ナデ・ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白　5Y7/1	やや密（～1.5㎜の砂粒含む）	良	底部:1／3	
43	025−07	ＳＤ６	陶器　鉢	口縁部	—	—	ロクロナデ	灰白　N8／0	やや粗	並	不明	
44	013−03	ＳＤ７	土師器　皿	体部欠損	9.4	1.9	ナデ・ヨコナデ・オサエナデ	にぶい黄橙　5YR7／4	やや粗（～5.0㎜の小石・砂粒含む）	並	口縁:1／4	
45	013−02	ＳＤ７	土師器　皿	口縁部	□14.2	3.6	ナデ・ヨコナデ・オサエナデ	橙　7.5YR7／6	やや密	並	口縁:1／3	
46	013−01	ＳＤ７	土師器　鍋	口縁部	□21.0	—	ヨコナデ・ハケメ	にぶい黄橙　10YR7／2	やや粗（～2.5㎜の砂粒含む）	並	口縁:1／10	ソケメ３本／０.５cm
47	008−01	ＳＤ７	陶器　山皿	底部	4.6	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	5Y7／1	やや密（～2.0㎜の砂粒含む）	良	底部:7／8	籾殻痕・内面に自然釉
48	008−05	SD7	陶器　山皿	完形	□7.9　台4.0	2.0	ロクロナデ	灰白　2.5Y7／1	やや粗（～2.5㎜の砂粒含む）	良	ほぼ完存	糸切痕・内面に自然釉

第２表　遺物観察表（1）

報告書番号	登録番号	出土位置	種類（器種）	器形	計測値（cm）		観察事項	色調	胎土	焼成	残存度	備考
					径	器高	形態・成形・調整技法の特徴					
49	009−03	SD7	陶器 山皿	口縁欠損	□8.4 台4.4	2.2	ロクロナデ	灰白 2.5Y8／1	やや密(5.0㎜の小石含む)	良	完存	糸切痕・内面に自然釉
50	009−04	SD7	陶器 山茶椀	体部欠損	□15.2 台6.3	5.5	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 N7／1	粗(～5.0㎜の小石・砂粒含む)	良	口縁:1／4	籾殻痕・糸切痕・両面に自然釉
51	008−04	SD7	陶器 山茶椀	体部欠損	□15.0 台6.7	5.3	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 2.5Y8／1	密(～1.0㎜の砂粒含む)	良	口縁:1／12	籾殻痕・糸切痕
52	010−02	SD7	陶器 山茶椀	体部欠損	□15.9 台7.2	5.7	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 5Y7／1	やや密(～2.5㎜の砂粒含む)	良	口縁:小片	糸切痕
53	008−02	SD7	陶器 山茶椀	体部欠損	□15.9 台8.1	5.7	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 N7／1	密(～1.5㎜の砂粒含む)	良	口縁:1／4	糸切痕・両面に自然釉
54	009−02	SD7	陶器 山茶椀	口縁部	□16.7	—	ロクロナデ	灰白 7.5Y7／1	密	良	口縁:小片	
55	010−05	SD7	陶器 山茶椀	底部	7.6	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ・ナデ	灰白 5Y7／1	やや密(1.5㎜の砂粒含む)	良	底部:3／4	籾殻痕
56	010−06	SD7	陶器 山茶椀	底部	7.1	—	内：ナデ・ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ・ナデ	灰白 N7／0	やや粗(～2.0㎜の砂粒、7.0㎜大の小石含む)	良	底部完存	籾殻痕・糸切痕
57	011−02	SD7	陶器 山茶椀	底部	7.1	—	内：ナデ・ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 2.5Y8／2	粗(～8.0㎜の砂・小石粒を含む)	良	底部完存	籾殻痕・糸切痕
58	008−07	SD7	陶器 山茶椀	底部	7.6	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 7.5Y7／1	やや粗(～8.0㎜の小石含む)	良	底部:1／2	籾殻痕・糸切痕
59	012−06	SD7	陶器 山茶椀	底部	8.4	—	内：一方向ナデ・ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 2.5Y7／1	やや密	並	底部:1／2	籾殻痕・糸切痕
60	008−06	SD7	陶器 山茶椀	底部	8.8	—	内：ロクロナ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 5Y7／1	密(～2.0㎜の砂粒含む)	良	底部:1／4	籾殻痕
61	013−07	SD7	陶器 山茶椀	底部	8.3	—	内：ロクロナ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 2.5Y8／1	やや密	並	底部:1／4	籾殻痕・糸切痕
62	008−03	SD7	陶器 山茶椀	底部	7.6	—	内：一方向ナデ・ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 2.5Y7／1	密	良	底部完存	籾殻痕・糸切痕
63	011−01	SD7	陶器 山茶椀	底部	7.9	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 5Y7／1	やや密(～1.5㎜の砂粒含む)	良	底部完存	籾殻痕・糸切痕・内面黒変
64	010−07	SD7	陶器 山茶椀	底部	8.9	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 5Y7／1	やや粗(～3.0㎜の砂粒含む)	良	底部:1／3	籾殻痕・糸切痕
65	013−05	SD7	陶器 山茶椀	底部	7.8	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 10YR8／1	やや密	良	底部:1／4	内面に自然釉
66	009−01	SD7	陶器 山茶椀	底部	7.5	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 5Y7／1	密	良	底部完存	糸切痕・内面に自然釉
67	009−07	SD7	陶器 山茶椀	底部	7.7	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 2.5Y7／1	やや密(～3.0㎜の砂粒含む)	良	底部:1／2	糸切痕・内面に自然釉
68	012−08	SD7	陶器 山茶椀	底部	7.6	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ・ナデ	灰白 2.5Y7／1	やや密	並	底部:1／4	
69	009−06	SD7	陶器 山茶椀	底部	8.2	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 2.5Y8／1	やや密(～2.0㎜の砂粒含む)	良	底部完存	糸切痕・内面に自然釉
70	012−07	SD7	陶器 山茶椀	底部	8.7	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 2.5Y8／1	やや密	並	底部:1／3	糸切痕
71	012−05	SD7	陶器 山茶椀	底部	7.5	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 5Y7／1	やや密	良	底部ほぼ完存	糸切痕
72	010−03	SD7	陶器 山茶椀	底部	7.7	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 7.5YR7／1	やや粗(～2.0㎜の砂粒含む)	良	底部完存	糸切痕
73	010−04	SD7	陶器 山茶椀	底部	8.3	—	内：ナデ・ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 5Y7／1	やや粗(～2.5㎜の砂粒含む)	良	底部ほぼ完存	糸切痕
74	011−03	SD7	陶器 山茶椀	底部	6.9	—	内：ロクロナ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 2.5Y7／1	やや密(～1.0㎜の砂粒含む)	良	底部:2／3	糸切痕
75	011−04	SD7	陶器 山茶椀	底部	6.8	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 5Y7／1	やや密(～1.5㎜の砂粒含む)	良	底部:1／2	糸切痕・内面に黒色付着物
76	009−05	SD7	陶器 山茶椀	底部	—	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 2.5Y7／1	密	良	不明	糸切痕・墨書・内面に自然釉
77	010−01	SD7	青磁 椀	口縁部	□17.0	—	ロクロケズリ	素地:灰白 7.5Y7／1 釉：灰白 10Y7／1	密（微砂粒含む）	良	口縁:1／7	施釉
78	012−01	SK8	陶器 山茶椀	口縁欠損	□16.3 台7.2~7.7	5.6	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 2.5Y7／1	やや密(～3.5㎜の小石・砂粒含む)	並	口縁:4／5	糸切痕・口縁に自然釉
79	012−03	SK8	陶器 山茶椀	底部	7.0	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 2.5Y7／1	やや密	並	底部:1／5	籾殻痕
80	012−02	SK8	陶器 山茶椀	底部	8.6	—	内：一方向ナデ・ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 2.5Y7／1	やや密	並	底部:1／4	籾殻痕・糸切痕・内面に自然釉
81	012−04	SK8	陶器 山茶椀	底部	8.5	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 2.5Y7／1	やや密	並	底部:1／4	籾殻痕・糸切痕・内面に墨痕
82	017−05	SK10	瓦器 皿	口縁欠損	□8.8	1.9	ミガキ・ヨコナデ・オサエ・ナデ	灰 N5／0	密	並	口縁:3／4	
83	022−06	SK10	土師器 皿	口縁部	—	—	ナデ・ヨコナデ	浅黄橙 10YR7／3	やや密（微砂粒）	並	不明	径不明
84	024−04	SK10	土師器 皿	口縁部	□13.9	3.0	ナデ・ヨコナデ・オサエ	浅黄橙 10YR8／3	やや密	並	口縁:1／10	
85	024−03	SK10	土師器 甕	口縁部	□25.4	—	ナデ・ヨコナデ・オサエ	浅黄橙 10YR8／3	粗	並	口縁:1／5	外面に煤付着
86	023−03	SK10	土師器 鍋	口縁部	□34.0	—	ヨコナデ・ナデ・ハケメ	灰白 10YR8／2	やや密	並	口縁:1／10	
87	016−01	SK10	土師器 鍋	口縁部	□23.0	—	内：ナデ・ヨコナデ 外：ヨコナデ・オサエ・ナデ	黒褐 10YR3／2	粗(～2.2㎜の砂粒含む)	並	口縁:1／4	
88	025−01	SK10	土師器 鍋	口縁部	□26.8	—	ナデ・ヨコナデ・オサエ	浅黄橙 10YR8／	やや粗	並	口縁:1／6	
89	023−02	SK10	土師器 鍋	口縁部	□32.0	—	ヨコナデ・オサエ	にぶい黄橙 10YR7／2	やや粗(～1.5㎜の砂粒含む)	並	口縁:1／8	
90	023−04	SK10	土師器 鍋	口縁部	□30.0	—	ナデ・ヨコナデ・オサエ	褐灰 7.5YR4／1	やや粗（微砂粒）	並	口縁:1／12	外面に煤付着
91	023−01	SK10	土師器 鍋	口縁部	□28.0	—	工具ナデ・ヨコナデ・オサエ	灰黄褐 10YR6／2	やや粗(～1.5㎜の砂粒含む)	並	口縁:1／6	外面に煤付着
92	024−01	SK10	土師器 鍋	口縁部	□36.7	—	ナデ・ヨコナデ・オサエ	灰褐 7.5YR6／2	やや粗	並	口縁:1／16	外面に煤付着
93	022−04	SK10	土師器 鍋	口縁部	□24.9	—	ヨコナデ	にぶい黄橙 10YR8／3	やや粗	並	口縁:1／8	外面に煤付着
94	014−04	SK10	陶器 山皿	完形	□9.0	1.8	ロクロナデ	灰白 2.5Y8／1	やや密	並	完存	糸切痕・内面に自然釉
95	014−03	SK10	陶器 山皿	完形	□9.1	2.0	ロクロナデ	灰白 N8／0	やや密	並	完存	糸切痕・口縁に自然釉
96	014−01	SK10	陶器 山皿	完形	□9.1	2.1	ロクロナデ	灰白 2.5Y7／1	やや密	並	完存	糸切痕

第3表　遺物観察表(2)

報告書番号	登録番号	出土位置	種類（器種）	器形	計測値（cm）		観察事項	色調	胎土	焼成	残存度	備考
					径	器高	形態・成形・調整技法の特徴					
97	022−03	SK10	陶器 山皿	底部	4.9	—	ロクロナデ	灰白 2.5Y7／1	やや密	良	底部:1／2	糸切痕
98	015−02	SK10	陶器 山茶椀	体部欠損	□15.3 台7.8~8.0	5.5	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 2.5Y8／1	やや粗	並	口縁:5／12	籾殻痕・糸切痕
99	014−06	SK10	陶器 山茶椀	体部欠損	□15.4 台7.3~7.6	5.0	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 10YR7／1	やや粗	並	口縁:1／2	籾殻痕・糸切痕・底部黒変
100	021−01	SK10	陶器 山茶椀	体部欠損	□16.0 台7.2~7.5	4.7	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ・ナデ	灰白 2.5Y7／1	やや密	並	口縁:小片	籾殻痕
101	015−05	SK10	陶器 山茶椀	体部欠損	□15.5 台6.8	5.2	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 2.5Y7／1	やや密	並	口縁:1／5	籾殻痕・糸切痕
102	015−04	SK10	陶器 山茶椀	体部欠損	□15.0 台7.5	5.4	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 N7／0	やや密	並	口縁:1／7	籾殻痕・糸切痕
103	021−03	SK10	陶器 山茶椀	体部欠損	□15.0 台7.2	5.5	内：一方向ナデ・ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 5Y7／1	やや密	並	口縁:1／6	籾殻痕・糸切痕・内面黒変
104	015−01	SK10	陶器 山茶椀	体部欠損	□15.85 台7.1~7.5	5.1	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 2.5Y8／1	やや密	並	口縁:1／4	糸切痕・内面に自然釉
105	016−02	SK10	陶器 山茶椀	口縁欠損	□15.8 台6.4	5.7	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ・ナデ	灰白 5Y7／1	密	良	ほぼ完存	
106	014−02	SK10	陶器 山茶椀	体部欠損	□15.5~15.6 台6.8	5.3	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 5Y7／1	やや粗	並	口縁:3／4	糸切痕
107	015−03	SK10	陶器 山茶椀	体部欠損	□15.7 台7.6	5.3	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 N8／0	やや密	並	口縁:1／4	糸切痕・内面～口縁に自然釉
108	017−01	SK10	陶器 山茶椀	体部欠損	□15.4 台7.6	5.3	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 5Y7／1	やや密（~1.5㎜の砂粒含む）	良	口縁:1／4	糸切痕
109	021−02	SK10	陶器 山茶椀	体部欠損	□16.7 台8.0	5.5	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 5Y7／1	やや密	並	口縁:1／8	糸切痕
110	017−02	SK10	陶器 山茶椀	口縁部	□15.4	—	ロクロナデ	灰白 N8／0	やや密（~1.5㎜の砂粒含む）	良	口縁:1／4	
111	016−05	SK10	陶器 山茶椀	口縁部	□14.4	—	ロクロナデ	灰白 5Y8／1	密（~1.5㎜の砂粒含む）	慮	口縁:1／4	
112	016−03	SK10	陶器 山茶椀	底部	6.2	—	ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 2.5Y7／1	やや粗（~2.5㎜の砂粒含む）	並	底部:3／4	籾殻痕・糸切痕
113	014−05	SK10	陶器 山茶椀	底部	6.8~7.2	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 N8／0	やや密	並	底部完存	糸切痕・内面に自然釉
114	021−05	SK10	陶器 山茶椀	底部	7.9	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 N7／0	やや密	並	底部:3／4	糸切痕・墨痕
115	016−04	SK10	陶器 山茶椀	底部	8.6	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 5Y7／1	密	良	底部:1／3	糸切痕・内面に自然釉
116	016−06	SK10	陶器 山茶椀	底部	6.4~7.2	—	ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 5Y7／1	密（~1.5㎜の砂粒含む）	並	底部完存	糸切痕
117	021−06	SK10	陶器 山茶椀	底部	6.3~6.7	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 2.5Y7／1	やや密	並	底部完存	糸切痕
118	017−04	SK10	陶器 山茶椀	底部	7.6	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 5Y7／1	やや密（~1.2㎜の微砂粒含む）	良	底部:1／4	糸切痕
119	022−02	SK10	陶器 山茶椀	底部	7.1	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 N7／0	やや密	並	底部:1／4	
120	017−03	SK10	陶器 山茶椀	底部	7.4	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ・ナデ	灰白 2.5Y8／1	やや密（~2.2㎜の砂粒含む）	並	底部:1／2	内面に自然釉
121	022−01	SK10	陶器 山茶椀	底部	7.2	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 5Y7／1	やや密	良	底部:1／2	糸切痕
122	021−04	SK10	陶器 山茶椀	底部	6.6	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 2.5Y7／1	やや密	並	底部完存	籾殻痕・糸切痕・墨痕
123	021−07	SK10	陶器 山茶椀	底部	7.1	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	黄灰 2.5Y6／1	やや粗（~3.0㎜の砂粒含む）	並	底部:1／4	籾殻痕・糸切痕
124	022−05	SK10	土師器 甕	口縁部	□21.0	—	ヨコナデ	浅黄橙 10YR8／3	やや密（微砂粒）	並	口縁:1／12	
125	025−05	SK10	瓦器 椀	口縁部	□15.9	—	ナデ・オサエ・ミガキ	灰 N4／0	密	並	口縁:1／8	
156	025−03	SD12	陶器 鉢	口縁部	—	—	ロクロナデ	にぶい橙 5YR7／4	やや粗	並	不明	径不明
157	025−04	SD12	土師器 鍋	口縁部	—	—	ヨコナデ	にぶい橙 5YR7／4	やや粗	並	不明	径不明・外面に煤付着
158	026−06	B3 P1	陶器 山皿	口縁部	□8.1	2.1	一方向ナデ・ロクロナデ	灰白 2.5Y8／1	やや粗（~3.0㎜の砂粒含む）	良	ほぼ完存	糸切痕
159	027−02	B3 P1	土師器 鍋	口縁部	□27.0	—	ヨコナデ・オサエ	灰黄褐 10YR6／2	粗（~2.0㎜の砂少し含む）	並	口縁:1／6	外面に煤付着
160	027−01	B3 P1	土師器 鍋	口縁部	□28.4	—	ヨコナデ・オサエ	浅黄橙 10YR8／3	粗（~1.5㎜の砂少し含む）	並	口縁:1／8	外面に煤付着
161	026−02	B3 P1	陶器 山茶椀	体部欠損	□17.8 台8.6	5.2	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 5Y7／1	やや密（~1.0㎜の砂粒含む）	良	口縁:1／5	籾殻痕・糸切痕・内面に自然釉
162	026−01	B5 P1	陶器 山茶椀	完形	□15.6 台6.8	5.8	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 2.5Y7／1	密（~1.0㎜の砂少し含む）	良	ほぼ完存	糸切痕・内面に自然釉
163	027−03	A8 暗灰褐色土	土師器 皿	口縁欠損	□8.3	1.8	ナデ・ヨコナデ・オサエ	にぶい黄橙 10YR7／4	やや密（~0.5㎜の砂少し含む）	並	口縁:3／4	
164	027−04	A8 暗灰褐色土	土師器 皿	体部欠損	□8.3	1.8	ナデ・ヨコナデ・オサエ	にぶい黄橙 10YR7／4	やや密（~0.5㎜の砂少し含む）	並	口縁:1／3	
165	026−04	A8 暗灰褐色土	陶器 山茶椀	底部	7.6	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 2.5Y7／1	やや密（~1.5㎜の砂粒含む）	良	底部完存	籾殻痕・糸切痕
166	026−03	A8 暗灰褐色土	陶器 山茶椀	底部	7.8	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 2.5Y8／1	やや密（~1.5㎜の砂粒含む）	良	底部完存	籾殻痕・糸切痕・内面に自然釉
167	029−06	A8 包含層	陶器 山皿	口縁部	□19.6	—	ロクロナデ	灰 5Y6／1	やや密（~1.2㎜の微砂粒含む）	並	口縁:小片	外面に自然釉
168	029−03	A19 包含層	土師器 皿	底部	10.0	—	ロクロナデ	浅黄橙 10YR8／4	密	良	底部:小片	
169	030−02	A50 包含層	土師器 羽釜	体部	—	—	内：工具ナデ 外：ナデ・貼付ナデ	淡黄橙 7.5YR8／3	やや密（~1.8㎜の砂粒含む）	並	残存わずか	
170	029−05	A18 包含層	陶器 椀	体部欠損	□9.0 台3.0	3.9		群青色 明青灰 5B7／1より薄い	密	良	口縁:小片	施釉
171	030−05	A18 包含層	陶器 鉢	口縁部	□14.3	—	ロクロナデ	明緑灰 灰白 5Y8／1	密（~0.8㎜の砂粒含む）	良	口縁:1／8	施釉
172	029−07	A50 包含層	陶器 鉢	口縁部	□11.8	—	ロクロ水挽き	褐 10YR4／6	やや密（~0.6㎜の微砂粒含む）	良	口縁:1／6	施釉
173	029−02	B6 包含層	土師器 皿	体部欠損	□9.0	1.2	ナデ・オサエ	浅黄橙 10YR8／3	やや密（~0.8㎜の微砂粒含む）	並	口縁:1／3	
174	029−01	B6 包含層	土師器 皿	口縁部	□11.3	—	ヨコナデ・ナデ	浅黄橙 10YR8／3	やや密（~1.0㎜の砂粒含む）	並	口縁:1／4	

第4表　遺物観察表(3)

報告書番号	登録番号	出土位置	種類（器種）	器形	計測値（cm）		観察事項	色調	胎土	焼成	残存度	備考
					径	器高	形態・成形・調整技法の特徴					
175	029−04	B7 トレンチ	土師器 皿	口縁部	口17.8	—	ナデ・ヨコナデ	淡橙 5YR8／4	粗（〜2.8㎜の砂粒含む）	並	口縁:1／6	
176	030−03	B6 包含層	土師器 鍋	口縁部	口21.6	—	ナデ・ヨコナデ	浅黄橙 10YR8／3	粗（〜2.2㎜の砂粒含む）	並	口縁:1／14	
177	028−01	B7 トレンチ	陶器 山茶椀	体部欠損	口17.0 台7.2	5.6	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 2.5Y7／1	やや密（〜1.3㎜の微砂粒含む）	並	口縁:1／4	糸切痕
178	028−03	B7 トレンチ	陶器 山茶椀	底部	7.8	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 5Y7／1	密（〜1.3㎜の微砂粒含む）	並	底部完存	糸切痕
179	026−05	B8 暗灰褐色土	陶器 山茶椀	底部	7.0	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 2.5Y7／1	やや密（〜1.0㎜の砂少し含む）	良	底部完存	両面に自然釉・糸切痕
180	028−02	B7 トレンチ	陶器 山茶椀	底部	7.3〜7.9	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ・ナデ	灰白 2.5Y7／1	やや密（〜1.8㎜の砂粒含む）	並	底部完存	
181	028−07	B6 包含層	陶器 山茶椀	底部	7.4	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 5Y7／1	密	良	底部:1／4	糸切痕・内面に自然釉
182	028−06	B7 包含層	陶器 山茶椀	底部	7.0	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 2.5Y8／1	粗（〜4.2㎜の小石含む）	並	底部:1／2	糸切痕
183	028−09	B7 包含層	陶器 山茶椀	底部	7.0	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ・ナデ	灰白 2.5Y8／1	やや密	並	底部:1／4	内面黒変
184	028−05	B4 包含層	陶器 山茶椀	底部	7.0	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 5Y7／1	密	並	底部:5／6	糸切痕
185	028−08	B7 包含層	陶器 山茶椀	底部	7.4	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 5Y7／1	やや密（〜6.3㎜の小石含む）	並	底部:1／4	
186	028−04	B6 包含層	陶器 山茶椀	底部	7.8	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・貼付ナデ	灰白 2.5Y7／1	密（〜1.3㎜の微砂粒含む）	並	底部完存	籾殻痕・糸切痕
187	030−01	B6 包含層	焙烙	口縁部	—		ナデ・貼付ナデ	灰 N4／0	やや密（〜1.2㎜の砂粒含む）	並	不明	径不明・外面に煤付着
188	030−04	Y31 包含層	土師器 羽釜	口縁部	口25.0	—	内：ハケメ・ナデ 外：ナデ・貼付ナデ	にぶい黄橙 7.5YR7／4	やや密（〜1.0㎜の微砂粒含む）	並	口縁:小片	ハケメ９本／cm

報告書番号	登録番号	出土位置	取り上げ番号	器種	計測値（cm）			木質		備考
					長さ	幅	厚さ	平行	直行	
126	001−01	SK10	No.10	鉄釘	7.1	0.6	0.4	○		
127	001−02	SK10	No.11−①	鉄釘	5.4＋	0.5	0.6	○		２個体がＬ字状に錆着
			No.11−②		5.5＋	0.4	0.2			
128	001−03	SK10	No.17	鉄釘	7.4	0.5	0.4		◎	
129	001−08	SK10	20010209c−②・③	鉄釘	8.2	0.7	0.8	○		
130	001−04	SK10	20010209a−①	鉄釘	6.2＋	0.7	0.5	○		
131	001−07	SK10	20010209c−①	鉄釘	2.0＋	0.8	0.8			
132	001−09	SK10	20010213−①	鉄釘	3.3＋	0.5	0.5			
133	001−10	SK10	20010213−②	鉄釘	2.6＋	＊1.6	0.7		○	
134	001−05	SK10	20010209a−②	鉄釘	4.0＋	0.4	0.3			
135	001−06	SK10	20010209b	鉄釘	3.5＋	0.4	0.4		○	
136	001−11	SK10	20010215	鉄釘	2.4＋	0.2	0.4			
137	002−01	SK11	No. 1	鉄釘 （刃）	20.1	5.5	背0.2			
				（茎）	7.5＋	2.0	0.3			
138	003−11	SK11	20010220b	不明鉄製品	7.9	＊2.0	＊1.2		◎	
139	003−02	SK11	No.3−②	鉄釘	8.3	0.4	0.6	○	○	
140	003−09	SK11	No.7	鉄釘	8.3	0.4	0.4		◎	
141	002−07	SK11	No.2−⑥	鉄釘	2.9＋	0.4	0.4		◎	
142	002−04	SK11	No.2−③	鉄釘	4.1＋	0.5	0.4		◎	
143	002−06	SK11	No.2−⑤	鉄釘	3.0＋	0.6	0.6			
144	002−05	SK11	No.2−④	鉄釘	2.7＋	0.4	0.2		◎	
145	002−03	SK11	No.2−②	鉄釘	3.0＋	0.6	0.4		○	Ｌ字形
146	002−08	SK11	No.2−⑦	鉄釘	2.0＋	0.3	0.2	○		
147	002−02	SK11	No.2−①	鉄釘	6 .1＋	0.5	0.6	○		
148	003−05	SK11	No.4−②	鉄釘	4.4＋	0.4	0.4			
149	003−08	SK11	No.6−②	鉄釘	3.9＋	0.3	0,4			
150	003−07	SK11	No.6−①	鉄釘	2.5＋	＊1.0	＊0.8			
151	003−06	SK11	No.5	鉄釘	5.4＋	0.6	0.3		◎	先端が屈曲
152	003−01	SK11	No.3−①	鉄釘	2.6＋	＊1.0	＊1.0			
153	003−04	SK11	No.4−①	鉄釘	4.9＋	0.6	0.4	○		
154	003−03	SK11	No.3−③	鉄釘	6.5＋	＊0.8	＊0.8		◎	
155	003−10	SK11	20010220a−①・②	鉄釘	4.3,2.3	＊0.7	＊0.6	○	◎	

※『木質』…鉄釘の頭部から先端を結んだ軸に対して、木質の繊維方向が「平行」か「直行」かで分類した。特に残存状態の良いものを「◎」で表示。
※『長さ』…「＋」の付いている数値は残存長であることを示す。
※『幅・厚さ』…「＊」付きの数値は、錆化が著しく本来の形状が不確定なため現存の寸法を記載している。

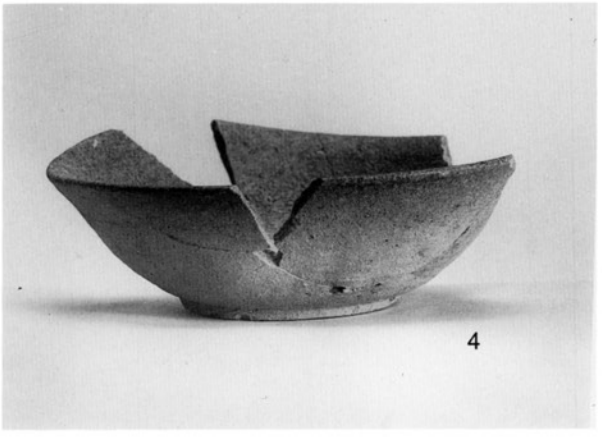
第５表　遺物観察表（4）

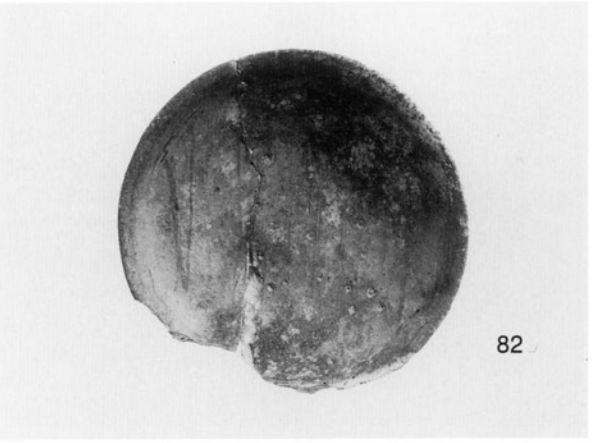
Ａ地区全景（西から）

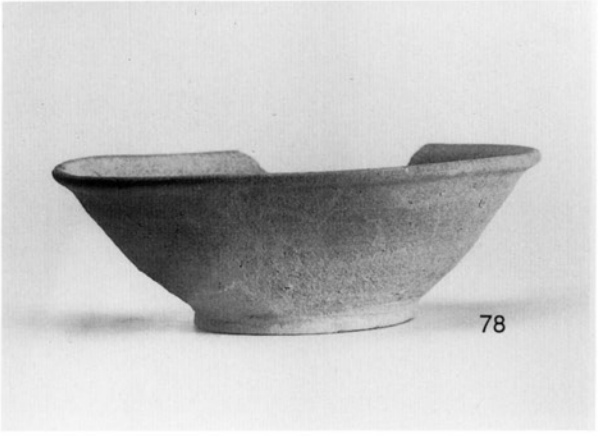
Ｄ地区全景（西から）

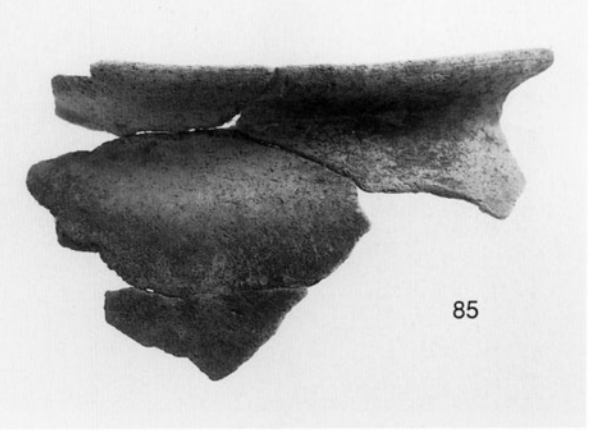
ＳＫ１０　土器出土状況（北から）

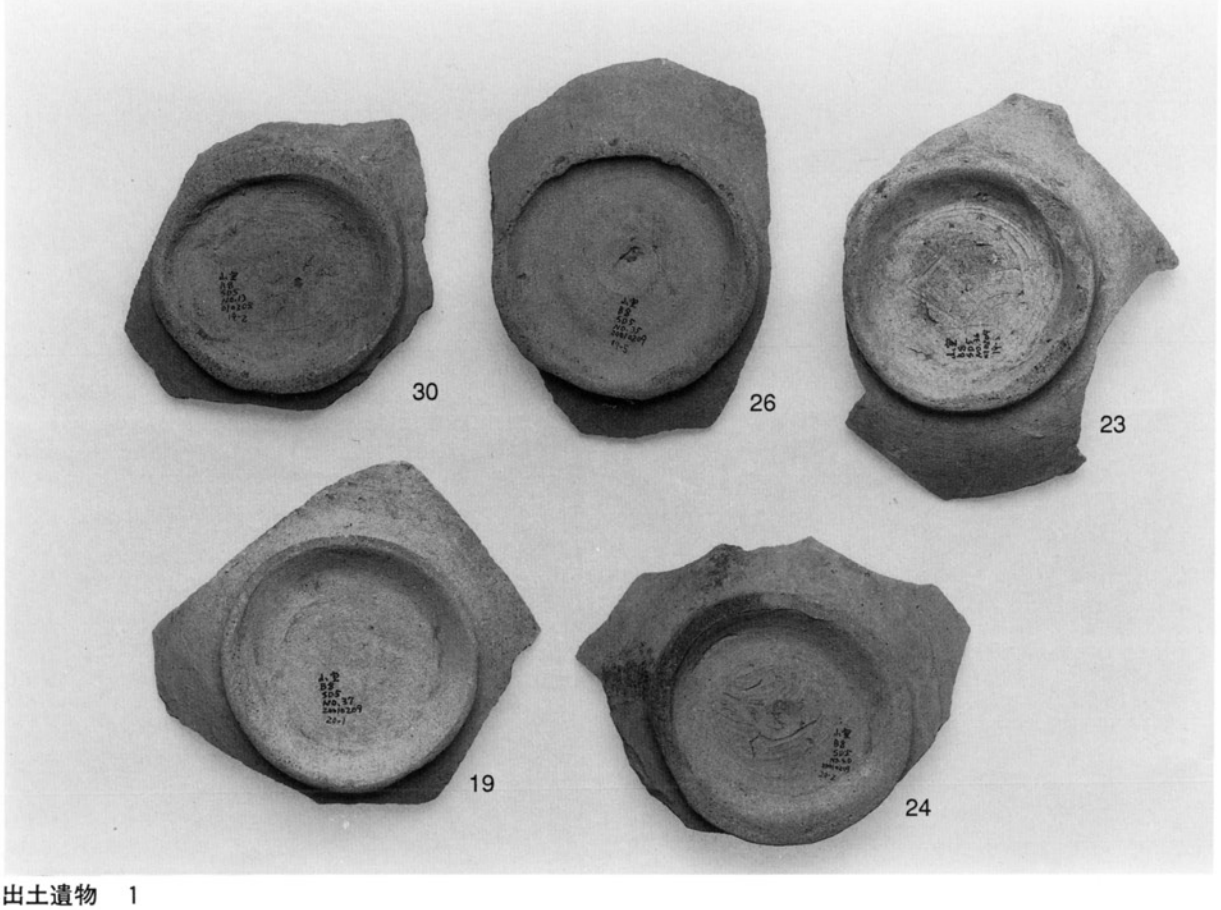
ＳＫ１１　鉄器出土状況（北から）



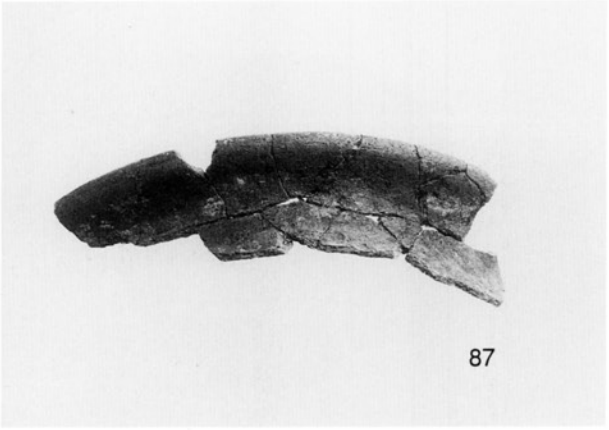


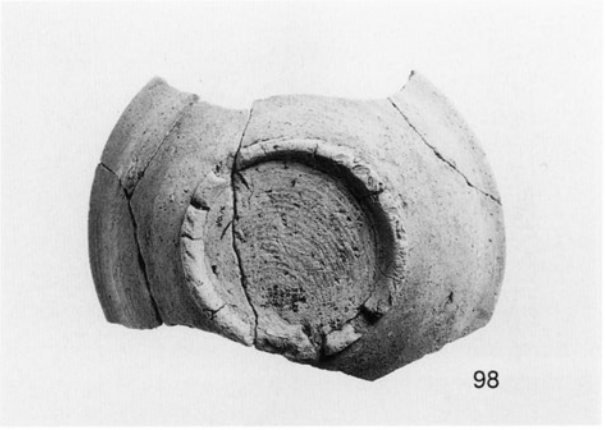


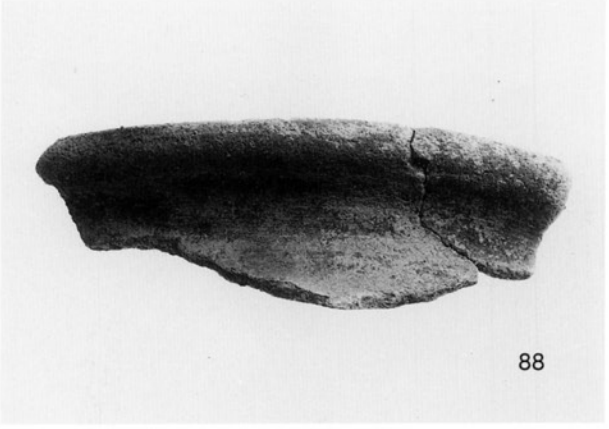


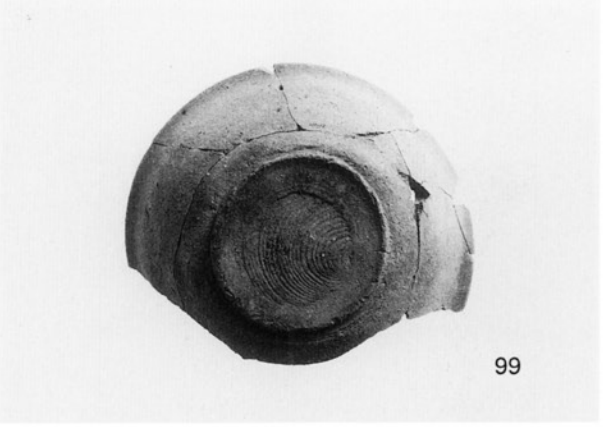


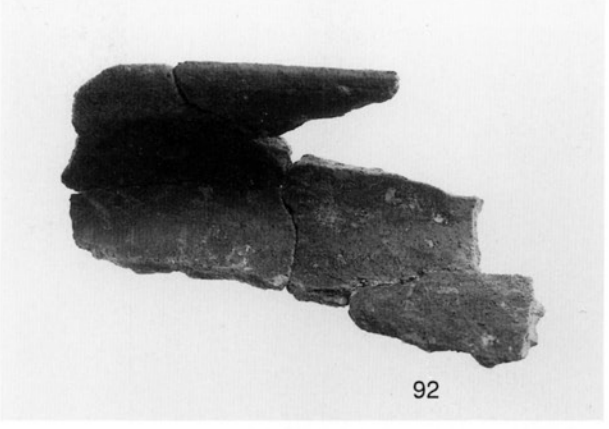
出土遺物　1

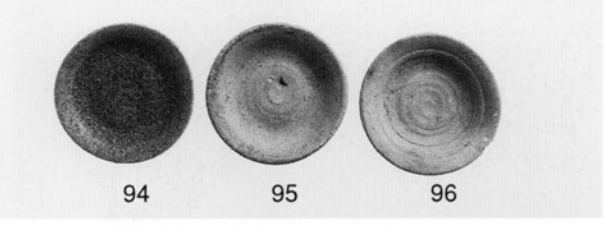


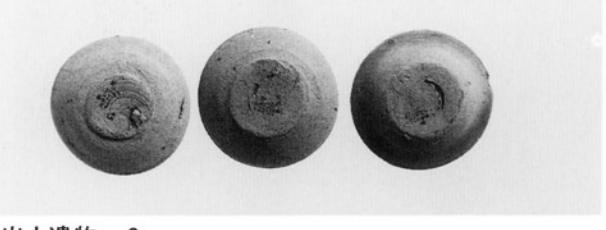


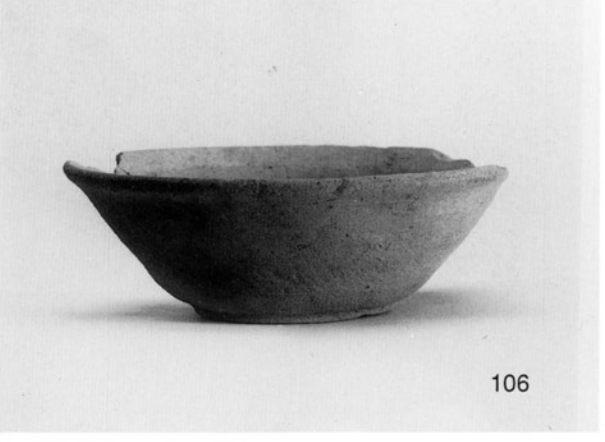












出土遺物　2

126

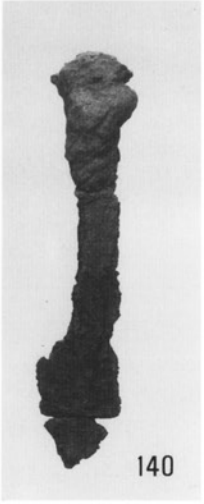
128

129

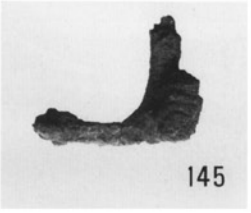
130

127

139


140

141


145

142

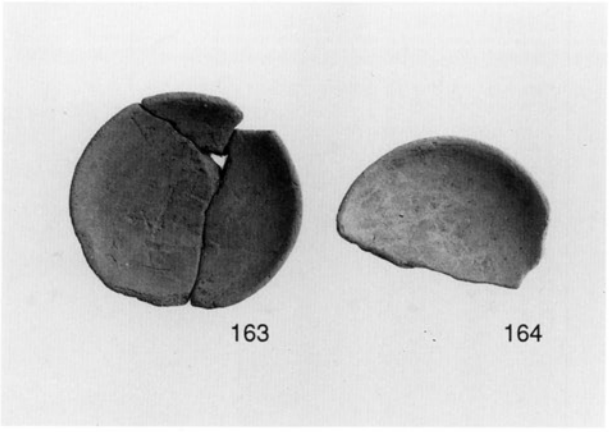
151

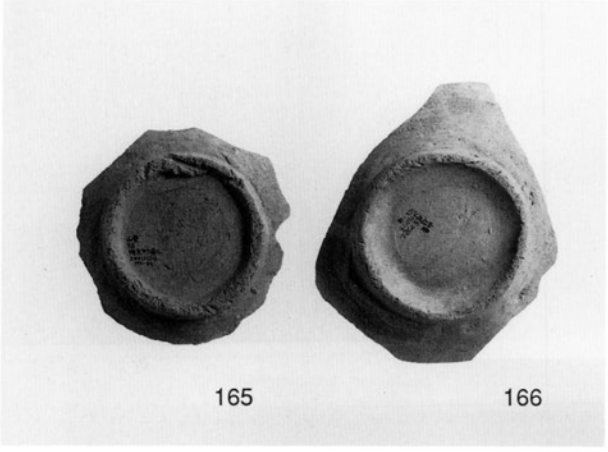
154

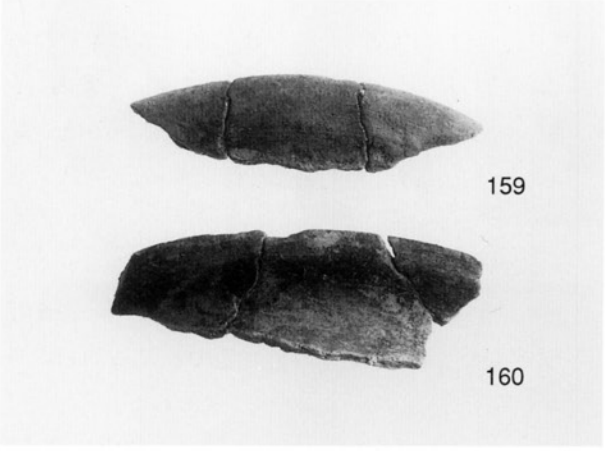
138

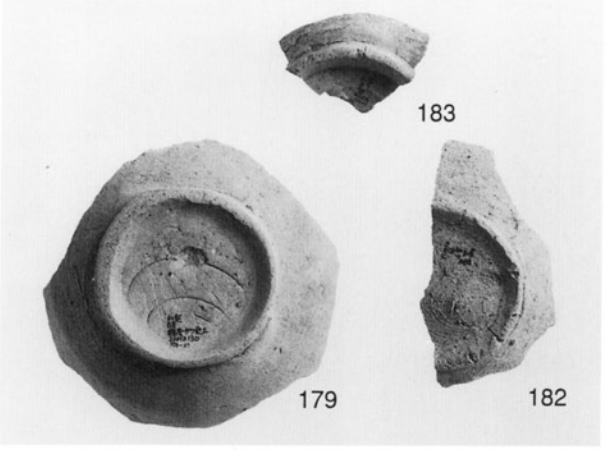
137

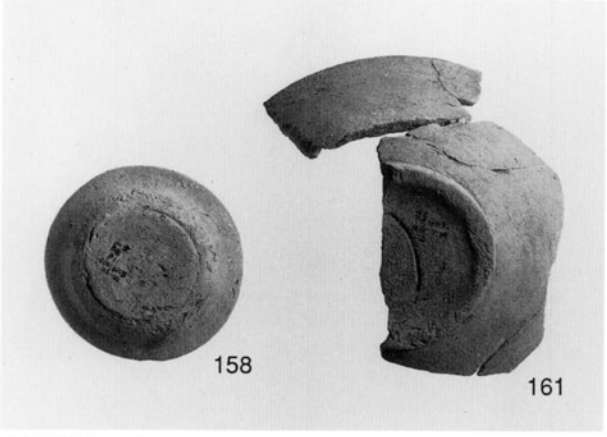
出土遺物　3

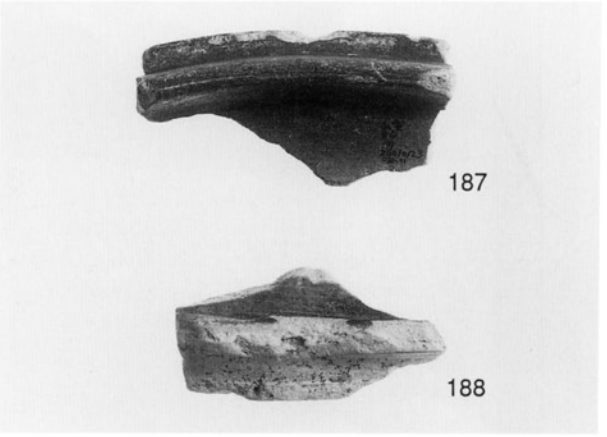












出土遺物　4

Ⅵ　附編　長持古里遺跡調査報告

1．試掘調査

長持古里遺跡は、久居市新家町に所在する遺跡で、雲出川左岸の沖積地に位置する。調査地の標高7m前後で、現況は水田、一部畑地である。

試掘調査は平成11年10月26日に実施した。試掘坑は2×1.5mの大きさで、G1～G7の7箇所設定した。

基本的層序は、第1層：暗褐灰色土（耕作土）、第2層：暗灰色土（床土）、第3層：褐灰色土、第4層：暗灰色砂質土、第5層：灰褐色土（中世の遺物包含層）、第6層：淡黄色細砂であり、以下は砂層と粘土層の互層が続く。第5層の遺物包含層上面の深さは50～80cmである。遺構は検出されなかったが、存在するならば第6層上面と考えられるが、その深さは70～110cmである。

試掘坑No.4からは土師器が、No.5からは山茶椀が出土した。No.7からは表土下60～70cmの第3層：灰褐色土層中から中世の土師器羽釜・鍋、陶器常滑焼が出土した。

以上の結果から試掘坑No.3以西の範囲に中世の遺跡が広がることがわかったため、工事方法を勘案の結果、工事立会が必要と判断した。

2．工事立会

工事立会は平成11年11月8日に実施した。工事に伴い掘削を受ける箇所は、現道北側の境界壁埋設部分と南側の側溝埋設部分である。

現道北側の境界壁埋設部分では、T1～T5の5箇所で、幅約1.2m、総延長約90mにわたり工事掘削深度である30cmまで掘り下げた。第3層の褐灰色土途中までの掘削となったが、埴輪、中世から近世にかけての土師器、近世陶器の小片が出土したため、第3層は近世の遺物包含層であることが判明した。

道路南側の側溝埋設部分については、現表土からの掘削深度が20cmで耕作土を除去するだけであるため、埋蔵文化財に影響はないものと判断した。

3．出土遺物

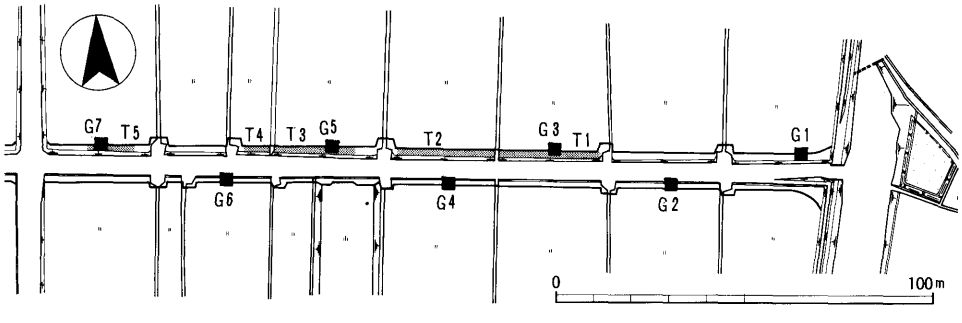
出土遺物は、いずれも小片であるが、工事立会で出土した3点のみ図示した。

1は埴輪のタダ付近の小片で、T1から出土したものである。表面は磨耗しており、調整等は不明である。土師質で、色調は黄橙色、胎土には赤色粒を含む。

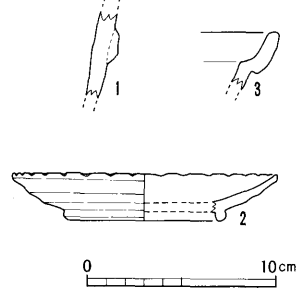
2は近世の陶器皿でT3から出土したものである。推定口径14cm、推定高台経高8cm、器高2.5cmで、口縁は波状にカットする。色調は灰白色、胎土には細砂粒を含む。内面全面と外面部に、灰オリーブ色の施釉がみられる。

3は近世の陶器擂鉢の口縁部小片で、T1から出土した。口縁直下がくびれるもので、内面に段を有するものである。色調は淡黄色で、胎土2mm未満の砂粒を含む。赤褐色の施釉が見られる。

（中川・河北）



第13図　調査区位置図（1：2,000）



第14図　出土遺物実測図(7)（1：4）

報告書抄録

ふりがな	やまむろいせき はっくつちょうさ ほうこく
書名	山室遺跡発掘調査報告
副書名	附編　長持古里遺跡調査報告
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	232
編著者名	中川　明・山岡奈美恵・河北秀実
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－0325 三重県多気郡明和町竹川503　TEL 0596－52－1732
発行年月日	2002年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
やまむろいせき 山室遺跡	みえけんひさいしまきのなちあざやまむろ 三重県久居市牧町字山室	406	207	36° 26′ 10″	136° 50′ 48″	2001.1.20～ 2001.2.9	600m²	平成12年度 一般農道整備事業 久居東部二期地区 事業に伴う本調査
ながもちふるさといせき 長持古里遺跡	みえけんひさいしにのみちょう 三重県久居市新家町 あざながもちふるさと 字長持古里	406		34° 39′ 22″	136° 29′ 04″	2000.10.26 2000.11.8	210m² 108m²	同試掘・工事立会

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺物	特記事項
山室遺跡	集落跡	平安時代 鎌倉～室町	灰釉陶器椀、土師器甕 山茶椀、山皿、土師器鍋 鉄鎌、鉄釘	鉄釘は木質付着
長持古里遺跡	集落跡	中世 近世	土師器 陶器	

平成14(2002)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年11月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告232

山室遺跡発掘調査報告

三重県久居市牧町

2002年 3月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　東海印刷株式会社